か！』

と、頼みました。

男わ仔細らしい顔をして、何かお呪をして居りましたが、やがて婆さんに向い、

『イヤ、その襦袢ならば、前の畑の藁の下にある。早く行つて出しなさい。』

と、云いました。

『それわまア有りがとう。』

と、婆さんわ直ぐ畑え行つて、藁の下を見ますと、成程自分の襦袢がありましたので、大層喜びまして、御禮にわ自分の拵えた、麥粉一袋をくれました。

それから二三日經ちますと、今度わ隣の庄屋の家で、小馬が一匹見えなくなりました。それもこの賣卜者が、前の晩にうまく盜み出して、森の中に繋いで置いたのを、誰も少しも知らなかつたのです。

そこで庄屋わ賣卜者の所え來て、

『自家の小馬が一匹無く成つたが、全體何所え逃げて行つたろう？』

と、聞きましたから、賣卜者わまじめな顏をして、

『イヤ、その小馬なら、昨夜盜人が盜み出して、まだ森の中に繋いである筈だ。早く行つて取り返えすが可い。』

と、云いますから、取り敢えず森の中え行つて見ましたら、案の定自分の小馬が、木に繋いでありましたので、直ぐにこれを連れて歸えり、また賣卜者えの禮にわ、百圓届けてやりました。

此評判が廣まりましたから、この貧乏な智慧男わ、忽ち賣卜の名人になつて、大層人に崇められました。

するとやがて王樣の所で、御大切な金の指輪が、何時の間にか無く成つたと云うので、この男の所えお使が立ち、直ぐに御殿え來て下う樣にと云う事です。

そこで賣卜者わ、お使と一所に御殿え來ますと、玉樣わお待ちかねで、

『此程から噂に高い、賣卜の名人わ其方か？　付いてわ早速だが卜つてくれ！　無く成つた乃公の指輪わ、全體何所にあるだろうナ？』

と、云うお言葉です。

『ハツ、畏まりました。』

と、云つたがこの賣卜者わ、今まで只智慧にまかせて、うま〳〵胡麻かしてばかりいたのですから、こう云う眞面目な卜占に成りますと、何うして少しも解りません。

が、其所わぬからぬ體で、

『かような大切な卜占わ、即座に御返答わ出來ませんから、何卒明朝まで御猶豫を願います。さすれば今夜の中に、篤と考えますると御座いましよう。』

と、申上げますと、王様も道理に思召し、

『成る程、それでわ今夜一晩の猶豫をつかわすから、明朝必ず卜ってくれよ。』

と、其まゝこの賣卜者を、一室の中えお入れ遊ばしました。

さて賣卜者わ、こうして一室の中えわ入れられましたが、元より神通も得て居ない身の、いくら一晩考えましても、指輪の行方の分る筈わありません。

『明日わ何と云ってお返事をしよう？　うかと間違った事を云った日にわ、この首が直ぐに飛んでしまうかも知れない。ハテ、ひよんな事に成ったものだ。』

と、獨り泣言を云うばかり、少しもよい智慧わ出て來ません。

『此上わ仕方が無いから、今夜一晩此所に居て、明日わ三番鷄の鳴くのを合圖に、此所をそつと逃げ出して、暫らく何所にか身を隱そう。』

と、こう覺悟を極めまして、夜の明けるのを待つて居りました。

玆に此の王様の御家來の中に、御側の御用を勤める用人と、御馬車の馭者と、お臺所の料理番と、が居りまして、兼てから王様の指輪の、世にも結構なのに眼をつけ、三人で申合せて、王様の油斷をしていらつしやる間に、そつとお手箱の中から盜んで置きました。

所が王様わ、その指輪の行方を調べる爲めに、評判の卜占の名人をお召しに成り、今夜一晩の中に、篤と卜わせると云う事を聞きましたから、さア氣が氣でありません。

三人わ額を集め、

『時に飛んだ事に成つて來たぞ。あの賣卜者わ評判の名人だから、事によるとおれ達の盜んだのを、うまく當てやがるかも知れないぜ。』

『大きにそうだ。て、これが當てられたが最後、乃公達わすぐ引ツつかまつて、直ぐにお處刑に成つてしまうんだ。』

『これわうつかりしちやア居られないぜ。今の間にそつと賣卜者の室え行つて、何を云つてるか樣子を聞こうぢやヤ無えか。』

『それがいゝ、それがいゝ。』

『だが三人一所に行くと、却つて先方に解るといけないから、これわ一人づゝ代り合つて行こう。』

『それがいゝ、それがいゝ。』

と、是からこの三人の中から、用人が一番先に出て、賣卜者の室え忍んで行きました。

で、まづ戸の外に立つて、じつと耳を引立てましたが、初めわ何も聞えませんでした。

するとやがて一番鷄の聲が、『コケコツコウ』と聞えます。

と、賣卜者わ膝を打つて、

『そうれまづ一つ來た。まだ二つ殘つてるナ。』

と、獨言を云いました。

用人わ聞いて吃驚しました。

『ヤツ。乃公の事をもう知つてるのか。これわ大變だぞ。』

と、急いで歸つて來ますと、今度わ駄者が代りに出まして、また戸の外で聞いて居ました。その時丁度二番鷄が鳴きました。

すると室の中の賣卜者わ、

『〆めた！　これで二つ來た。もうあと一つだぞ。』

と、云いましたので、駄者わギヨツとしまして、

『成る程乃公をもう知つてやがる。これわたまらん〳〵！』

と、急いで飛んで歸りまして、この事を話しますと、料理番わ肝を潰し、

『それぢやアあの賣卜者わ、乃公達の事をもう知つてるに相違無いから、なまじつかだまつている と、却つて乃公達の爲めに成るまい。これわ早く白狀して、ちツとても罪を輕くしてもらうが一番だ。』

と、云うので、兼て盜んで置いた指輪を持つて、三人共この賣卜者の所え來ました。

その途端に三番鷄が鳴き出しますと、賣卜者わ部室の中から、

『これでもう三つ共濟んだ、ドレ出掛けよう。』

と、戸を開けて出ましたから、三人わ其前に平伏し、

『少々お持ち下ださいまし！　まことに惡い事を致しました。全く王樣の御指輪わ、私共三人が、盜んだに相違御座りません、就きましてわ此の通り、指輪わ貴君樣に御返し申しますから、何卒御咎めの無い樣に、よろしくお執成しを願い上げます。』

と、指輪を賣卜者に渡しまして、手を合せて賴みます。

賣卜者わ喜ぶまいことか！　さてわ先刻からの獨言を、此奴等が聞いて自分達の事と思い、自分から白狀しに來たのか、これわ不思議な仕合せだと、思いながらもさあらぬ體で、

『それ見た事か！　此の賣卜の先生に會つた日にわ、何樣な事でも分らぬと云う事わ無い。なんと恐ろしいものであろうがナ。』

と、高慢に睨めつけて、それから王樣の前に出まして、

『御尋ねの御指輪わ、昨夜の中に篤と卜い、今朝御殿の床の下から、見出しまして御座ります。』

と、うや〳〵しく返上致しましたので、王樣も感心遊ばし、

『成る程其方わ賣卜の名人ぢや、褒美わ十分に取らせるぞ。』

と、金銀財寶山の樣に、この賣卜者に賜わりましたが、またあの三人の惡者わ、賣卜者の默つていたお庇で、何のお咎めも無かつたそうです。

剃髪城

よく狐に魅まれて、頭を圓坊主にされたという話がある。これわそれとわ少しわ異うが、時わ昔、所わ獨逸のルンメルスブルヒと云う町に、剃髪城というのがあつた。

只見る、巍然としたその城廓わ、幾多の兵亂の名殘を止めて、瓦わ落ち壁わ崩れ、只鬼蔦のまつわるがまゝに、荒れに荒れた有様であるが、何故か何人も手を入れず、町わ日增に榮えながら、城わ年々に寂を加えてゆく。

これと云うのも、實わ仔細のある事で。誰云うとなく、この城にわ、昔から不思議の幽靈が現われ、たま〳〵これに出遇うものわ、頭の髪わ云うまでもなく、髭から眉毛まで舐め落されて、生れもつかぬ圓坊主にされると云う、氣味の惡い評判があるからで。

暮れてわその大手前を、人ツ一子人通らばこそ。畫も氣紛れな野良犬の外わ、滅多に門内に入る者わなかつた。

すると、或る日の事で、不圖此所を通り合せた、一人の若い旅人があつた。それわ其名をフランツと云つて、暫く和蘭の方え出稼ぎに行つて居たが、今度故郷のブレイメンえと、錦をかざつて歸るのであつた。

元より通り一遍の旅人、こんな噂のあろうとわ知らず、恰も此所え來合せたが、丁度日も暮れかけて來たので、この城の大手前にある、一軒のホテルえと、一夜の宿りを求めに來た。

所が生憎く滿員て、ホテルにわもう空室が無い。其旨を云つて斷つたが、あの城の景色が好いから、是非共此所に泊り度いと云う。

そこで亭主わ考えた。折角の此の客人、この儘他のホテルえ遣るのわ、何とやら惜しくもあり……よしや、間違いが起つた處で、他國の者なら仕末も好いと、慾と好事が手傳つて、遂にこのフランツを、場所もあらうにこの古城の、奥の一間に泊める事にした。尤も賄わ、自分の宿から一切送る事にして。

フランツもまた後日の話の種、一晩位わ古城の中で、淋しく明かすも一興と、思いの外小言も云わず、やがて案内されたのわ、城の中でも奥まつた、但し破損の一番少ない、元わ城主の客間とでも思われる、立派な造作の一室であつた。

『それでわお氣味が惡う御座いましようが、何卒御ゆるりとお休息を……また御用が御座いましたら、あの窓をお明け下ださいますれば、手前共の二階が目の下で御座いますから、それからお呼び下ださいまして！』

と、云うかと思うと案内の者わ、そこ〳〵に引取つてしまう。

後にわフランツ、一時わ好事に小言も云わず、案内にまかせて來てわ見たものゝ、この大きな建物の中に、人間と云つてわ自分一人、他にわ何者が住んで居るやらと、思うと急に氣味が惡くなつたが、さて今更逃げもならず。まゝよ、一思いに寢てしまえば、何が出ても心配わ無いと、やがて隅の方のベツトの上に、ゴロリと横になつた思うと、旅の疲れで正體もなく、其のまゝグツスリ寢込んでしまつた。

四邊わシンと靜まり返つて、只後の森の方に、梟が時々鳴くばかり……

町の時計わ十時を打つた。まだ何の事も無い。已にして十一時が聞えた。まだ何者も現われない。が、更ける夜わ遠慮なく進んで、十二時の寺の鐘が、寂莫を破つて響いたと思うと、何におそれたかフランツわ、アツと一聲叫びながら、床の上に起き上つた。

枕元にわ細心のランプが、獨り忠實に瞬いて居る。

その薄暗い光で、廣い部室の隅々を、瞳を凝らして見まわしたが、さて何者も眼に入らない。

フランツわ呟きながら、また枕につこうとすると、不意に向うの戸が開いて、其所から入つて來

た者がある。

見ると、年の頃わ五十二三、滅法脊の高い、痩せた男だ。身にわ二三百年前の着物をつけ、其上から赤いマンテルを羽織つて、頭にわ尖つた頭巾を被つている。

フランツわギヨツとしたが、なまじ騒いでわ悪かろうと、息を殺して見て居ると、その痩男わ、さも屈託のある顔でしばらく其所に立つたまゝ、太息を吐いて居る様であつたが、やがて顔を此方え向けると、フランツを見てニツコリ笑い、やがて手をあげてさし招いた。

これにわ流石のフランツも、襟元から冷水を浴せられた様に、我知らず身を震わせたが、痩男の顔の色わ、却つて漸く生氣を添えて、別に害を加えるとも見えない。

フランツわ思い切つて、ベツトから下り立つて、二歩三歩進み寄ると、男わ靜かにうなづいて、傍の安樂椅子をさし、それに掛けろと手眞似をする。

もう斯うなつてわ度胸次第、暫時彼の爲すが儘に、身を委せる他わあるまいと、フランツわ恐氣もなく、やおらその椅子にかけると、男わ何所からか白い巾を出して、フランツの襟元から全身かけてそつと包んだ。何の事わ無い、身わ理髪所にあつて、鏡の前に据えられたと云う體だ。

見ると、何時の間にやら側の臺にわ、剃刀、磨革、小鉢、髭ブラシ、乃至石鹸、タオルまで、型の如く置いてある。

フランツわ不思議に思いながら、

『なんだ、お前わ理髪師さんか。おれわ頼んだ覺えわないが、丁度髯も延びてる所だ。あつさりやつて貰おうか。』

と、云う間に、男わ輕く點頭いて、はや剃刀を磨ぎ終り、それを顔に當てたと思うと、はや髯を落されてしまつた。

その仕事の手際の速さ！　フランツわ心の中に、少なからず感嘆して居ると、何時の間にか眉毛まで、綺麗に剃られて痕も無い。

『オイ〳〵何をするんだ？　そんな物剃つちや困るぢや無いか。』

と、云いながら立とうとしたが、こわ如何に！　身わ椅子に括りつけられた様で、ビリ、とも動し得ない。

その間に男の持つた剃刀わ、更に頭髪に及んで居る。

フランツわ氣が氣でなく、

『アツ、そいつを刺つちやいかん〳〵！』

と、聲を立てたが及ばゝこそ。見る〳〵内にフランツの頭わ、産毛一筋殘らぬ様に、見事圓坊主にされてしまつた。

仕事が濟むと件の男わ、しづかに巾を取つてくれたので、初めて身體が利く様になつて、フランツわ立ち上り、わが手で頭を撫でながら、

『ヤイ、酷い事をするぢや無いか。何だつて頼みもせんのに、この夜更にやつて來て、而も大切な眉毛から、頭髪までみんな剃つてしまうんだ?』

と、小言を云うと、男わ平氣で笑いながら、

『イヤ、お庇樣で私わ、漸く浮ばれる樣になりました。有難う御座います。』

と、却つて先方から禮を云う。

フランツわいよ〳〵不審晴れず、

『何だ、おれが坊主になつたお庇で、お前が浮ばれるたア何の事だ? 全體お前わ何者だ? 何所の何という理髪師なんだ?』

と、聞いた。

すると男わ俄に容を改めて、

『今わ何を秘しましよう。私わ理髪師わ理髪師でも、只の理髪師でわ御座いません。今から申せば三百年前、このお城にお抱えの、理髪師の亡靈で御座います。』

『何だ、やつぱり幽靈か。』

と、フランツわ思わず飛び退つたが、理髪師の幽靈わ手を振つて、

『イヤ、幽靈わ幽靈でも、決して祟りわ致しません。却つて貴君の御恩にわ、屹度お報い申します。』

と、云うのに少し安堵して、

『何だかさつぱり解らんが、全體御恩だのお庇だのつて、それわ一體何事なんだ?』

『その仔細わ斯うで御座います。何卒一ト通りお聞き下ださい!』

と、芝居なら合方の變る所、その幽靈の話すのを聞くと、由來わ次の通りであつた。

今を去る事凡そ三百年前、此の城にハルトマンと云つて、暴逆非道の大名が住んで居た。我が武力の強いのに委せて、近鄕近在の者共を、隨分苦しめ惱ませて居たが、中にもこの人の惡戲にわ、此城え來合せた客人を、片端から引捕えて、無理に髪を剃り、髭を落とし、眉毛まで綺麗に取り拂つて、そのまゝ城外え追い戻し、禿よ〳〵と手を拍して笑い罵り興ずるのを、何よりの樂しみとして居たのだ。

其頃ハルトマンのお抱えで、此の剃役をつとめたのが、即ち今の幽靈の、理髪師の男であつたのだが、ある時此の城え、ふと不圖來合せた巡禮があつた。

頭髪から髭まで雪の如く、如何にも氣高い翁であつたが、ハルトマンの手に掛つてわ往生、忽ち剃臺に据えられて、その白髪を物の見事に、剃り落される事となつた。

その時翁わ、何か心に念じて居つたが、やがて理髪師に向い、

『不憫ながら其方わ、死しても天えわ昇れまいぞ。さりとて地獄にも下りられず、一念長く此城に殘つて、宙に迷うこと幾百年、偶々若き旅人の、汝の剃刀におめず恐れず、心靜かに剃り落さする、強氣の者のあるまでわ、到底罪わ亡ぶまいぞよ。』

と、云うかと思うと掻き消す如く、其儘姿わ見えなくなつた。

所がその怨靈の祟りか、其後間もなく一揆が起つて、城わ忽ち攻め落され、ハルトマンわ討死をし、この理髪師も側杖で、もろくも其場に骸を曝したが、果して翁の云う通り、その一念城内に殘つて、人さえ見れば髪を剃ろう、髭を落そう眉取ろうと、剃刀片手に現れるが、誰あつて心靜かにその剃刀を受ける者なく、あれよ〳〵と逃げまわる。それを無理に引捕えて、力づくめに剃りわするが、それでわ罪を增す許りで、爾來星霜三百年、今以て浮ぶ瀬がないのであつた。

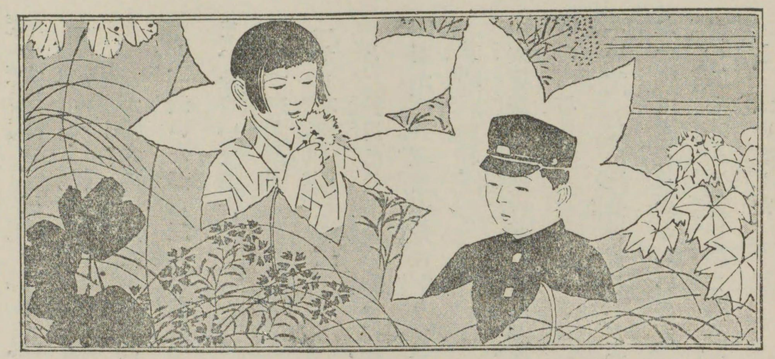
然るに今夜のフランツわ、成る程心にわ添わぬながら、さて恐れず、抵抗もせず、兎角わ亡靈の自由になつて、頭髪、髭、眉毛を殘りなく、素直に剃らせた功德によつて、漸く當時の罪も滅び、これからわ二度と再び、此の城に姿を現わさず、このまゝ昇天する事が出來て、こんな嬉しい事わ無いと、云うかと見る間に理髪師の姿わ、おのれも剃り落された様に、はや痕も止めない。

途端に鷄の聲が聞えて、窓の外わはや白んでいる。

フランツわ半ば夢心地、尙念の爲め手を上げて、自分の頭を撫でゝ見ると、髪わ一本も殘つて居ない。

さてわ夢でわなかつたか、何にしても不思議な事だと、そのまゝ城を出てホテルを訪れ、昨夜の事を委しく話すと、亭主も大きに驚いたが、兎も角も默つてわ居られず、其儘領主に屆けて出ると、領主もかねて此城の、變化の噂に手も付けられず、持て餘していた所、その變化もフランツのお庇で、二度と姿を見せぬとあつてわ、此様なめで度い事わ無いと、やがてフランツにわ、褒美を澤山賜わつたが、又ホテルの亭主も、フランツの手柄を喜ぶと同時に、元を云えば自分の爲めに、丸坊主になつたを氣の毒がり、その頭髪、髭、眉毛の、見事元の様に生え揃うまで、無代で自分が賄つて、ホテルの最上等の室に、手厚く款待して日を送らせた。

かくてフランツわ、思わぬ事から思わぬ名を擧げ、また思わぬ褒美を得て、それから三月許りの後に、めで度く故郷え歸りつき、思わぬ土產話を得て、此所でもまた思い設けぬ、人々の尊敬を受けたという。



金の實る木

金の實る木とわ、よく昔から云う事だが、全體どんな木であろうか、まだ碌々見た事も無い。何にしても重寶な木だ。如何かして一本欲しいものだと、こういう事を考えましたのわ、太郎に次郎に三郎と、この三人の兄弟でした。

其所で三人わ、種々考えました揚句、何でも斯う云うお金の事わ、大黒様が一番だ。彼方に御願申したら、屹度御利益があるに相違無いと、これから兄弟三人わ、近所の大黒様の御堂え行つて三七日の間參籠をして、

『南無大慈の大悲の大黒天！　何卒金の實る木を下ださいます様に！』

と、一所懸命に御願い申しました。すると其の結願の日に、本

尊の大黒様わ、三人の拝んで居る前え、ニコ〳〵と御出御に成り、

『善哉々々〳〵、雑煮に御しる粉、おまけに羊羹萩の餅を、棚から受けて食う様に、甘い事を願う奴等だ。だが折角の願望だから、いかにも金の實る木を遣ろう。ソレ、これを持つてけ！』

と、云いながら三人の前え、大きな金の珠を一個宛、例の木椎から振り出して、其儘消えておしまいなさいました。

後で三人わ、

『ヤレ有難や辱なや。』

と、各自にその金の珠を、押し戴いて歸りました。

木だか、其理由が急に解りませんから、三人わ又相談しました。

其時太郎わ、

『大黒様の御授けで、これが金の實る木なら、この儘大切に持つてさえ居れば、一生御金の困らないのだろう。』

『いや、なんぼ金の實る木だつて、只大切に持つて居るばかりぢやア、何の役にも立やしない。これわ何でも使うのが可いのだ。で、いくら使つても使つても、少しも小さく成らないというのが、金の實る木の有難い所だろう。』

と、云いました。

けれども三郎わ、やゝ暫らく考えて居ましたが、やがて膝をポンと打つて、

『いや解つた。これわ何でも御金の種だ。大黒様があゝ仰有つたのわ、今に御金の澤山實る、木の種だと云う事だろう。なんぼ大黒様だつて、當初から金の實る木を、御授け下だされる譯もないから、まづこの種を下だすつて、あとわ三人の了簡次第に、金を實らして見ろと云う、御思召に相違無い。』

と、こう云つて聞かせましたが、太郎も次郎も、

『ナニそんな事があるものか。金の實る木を遣ると仰有るからわ、これがその木に相違ないとも。』

と、少しも三郎の云う事を聞かず、各自に自分の强情を張つて、とう〳〵三人別れ〳〵に成りました。

其所で三郎わ、何でもこの種を地え蒔いて、はやく金の實る木にしなければならないが、それにわ何所が一番好かろう。尋常の畑え蒔いて置けば、鳥が掘くりに來るだろうし。と云つて庭の隅で、又犬が掘り返してしまう。山の蔭か、川の岸か、はて何所がよかろうな？　と、頻りに考えて居ます中に、不圖思い出しましたのわ、近所の銀の坑でありました。

これわ銀の坑と云つて、世間で使うお金が、始終出たり入つたりする、大きな坑でありますから、彼所え蒔いて置いたなら、屹度早く芽が出るだろうと、好い所え氣が付きまして、やがて三郎わ、金の實る木の種をば、その銀坑え持つて行つて、巧く蒔いて置きました。

すると案の定その種わ、忽ちの中に芽を吹いて、それから間も無く幹が伸び、枝が生え、葉が茂つたと思ふ中に、やがて初めの種の様な、金の珠が幾つも〳〵、ピカ〳〵光つて實りましたから、やれ嬉しやこれでこそ、ほんとの金の實る木だと、その又實を取つてわ、同じ様に銀坑え蒔きますと、それからわ又前の通り、幹を出し枝を生して、やがて金の珠が實り始めます。——それを取つて又蒔けば、直ぐと又芽が出る、こうして丹精して蒔く中に、初めわたつた一個であつた種が、段々に子を殖やして、遂にわ立派な金の實る木が、都合千本許りになりました。

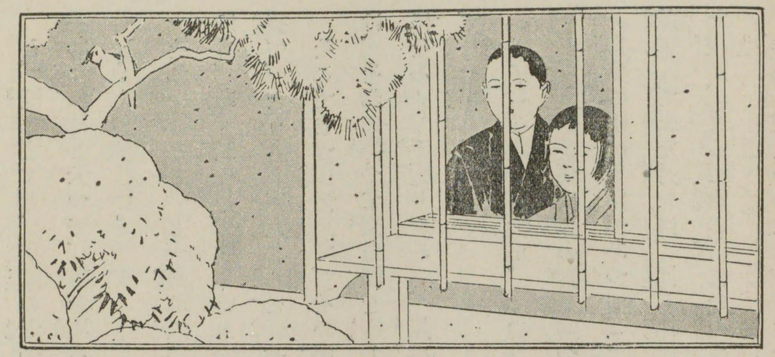
斯うなると三郎も、以前の三郎でわありません。金の實る木の三郎大盡と、世間の人に羨まれる様な、豪い大福長者に成りましたが、それに引かえて兄さん二人わ、何時まで經つても元の通りで、少しも御金が出來ません。とう〳〵終いにわ乞食に成つて、三郎の所え物貰いに來ました。

其時理由を聞いて見ますと、一番兄の太郎わ、金の實る木の種を貰つて、只是さえ持つて居れば、生涯御金に困らないと思いますから、迂濶して損してわいけない、他人に取られてわ成らないと、大切に綿で包んで、其上二重箱にちやんと入れて、藏の奥えしまつて置きましたが、それ計りを目的にして、少しも家業に實を入れませんでしたから、段々に貧乏して、終いにわ如何する事も出來ず、やつと初めて目が覺めて、その金の珠を出して見ましたら、何時までも藏つてばかり置いたので、眞青に錆びてしまい、もう何の役にも立ちませんでした。

それから二番目の兄さんの、次郎わ如何したかと云いますと、是わまた、金の實る木だから大丈夫だ。いくら使つても困る事わ無いと、あの金の珠をば、削つてわ使い、削つてわ使い、とう〳〵ほんとの珠無しにしてしまつたのです。

其所で三郎わ、よく又二人に云い聞かせまして、自分の家に實つてゐる、金の種を一個宛遣りましたが、今度わ太郎も次郎も、前に懲りて藏つてわ置かす、また無暗に使いもせず、みんな三郎の爲た通り、又銀坑え蒔きましたら、忽ちの中に芽を吹いて、それから芽を出し枝を生やし、やがて立派な金の實る木に成つて、この二人も三郎の様な、大福長者になりましたとさ。

月盜人



むかしまづある所に、一つの國がありましたが、其所にわ初め、月と云うものがありませんでしたから、夜になると、空わ黒い巾で包まれたように、もう眞闇に成つてしまいました。

ある時の事で、此國の百姓が四人、隣の國え旅をしましたが、その國わ夜になつても、矢張り明う御座いますので、百姓共わ變に思い、空を見上げて見ますと、高い山の上の、大きな樫の木の頂邊に、まるで晝間の太陽の通りな、圓い火の玉が掛つて居まして、それから白い光が、國中を一杯に照して居りますから、尚不思議に思いまして、

『全體あれわ何だ?』

と、聞きますと、其國の者の云いますにわ、

『あれわ月と云つて、夜を明るくするランプの様なものだ。』

と、云う事です。

それを聞きますと、月の無い國の百姓共わ、さあ羨ましくてたまりません。どうかして自分の方にも、あゝ云う月が欲しいものだと、頻りに眺めて居りましたが、やがて土地の者が居なくなつた後で、とう〳〵四人わ心を合せて、その月を盜む事に成りました。

そこでまづ山え來て、その中の一人が、この樫の木の頂邊まで登り、またその月に小さな穴をあけ、それに持つて來た繩を通して、下の者に相圖しますと、下の者わその繩を取つて、破れない様にそろ〳〵手繰りおろし、無事に下までおろした所で、今度わ人に見付からない様に、黒い風呂敷で月を包んで、

『さアもう此方の物だ。はやく逃げろ〳〵！』

と、大急ぎで自分の國え歸つて來ました。

自分の國にも山があつて、その頂上に矢張り大きな樫の木がありますから、まづその木の頂邊に、此盜んで來た月をば、同じ様に括りつけて見ますと、成る程その光りでもつて、今まで眞闇であつた夜が、まるで晝の様になりましたから、さあ國中わ大喜悦です。

中にも四人の者わ、自分達が骨折つて盜んで來た、この月のお庇で、國が明るくなつたのですから、大層威張つて居りました。

するとその中の一人が、ふと病氣に成りましたが、その爲めにやがて死ぬ事に成りました。その時百姓わ、

『私もいよ〳〵今度の病氣で、どうしても死なゝければ成らないが、あの月わ私等四人の物なのだから、死んだらあの月を四つに割つて、その一つを私と一所に埋めてくれ！』

と、こう云う遺言をしたのです。

で、やがてその男が死にますと、この遺言通り、月の右の端の方を、丁度四分の一だけ削ぎ取つて、棺桶と一所に墓場え埋めましたから、その爲めに眞圓な月が、少しいびつになり、隨つてその光りも少し弱く成つて來ました。

その中にまた一人同じ様に死ぬ事に成りますと、此男も前の眞似をして、

『あの月わ私達四人の物だから、私の分だけを削ぎ取つて死にますから、今わ折角の月も、半分しか光りません。』

と、云つて、また四分の一を持つて行きましたが、其度に自分の分丈削ぎ取つてしまつて、

すると又、三人目の男、四人目の男も、引き續いて死にましたから、とう〳〵折角盜んで來た月わ、まるで形無しに成つてしまつて、國中わまた元の通り、夜わ鼻を摘まれても解らない様な、眞闇な所に成つてしまいました。

所がそれに引き代えて、急に明るくなつたのわ、地の下の死人の居る所です。

それわ前の四人の百姓の、四分の一宛持つて來た月の破片が、地の下で出合いましたので、こゝで又眞圓な月に成り、一度にパツと光り初めましたから、その光りで今まで眞闇であつた死人の國が、一時に明るく成つて來ました。

するとまたその光りで、今まで死んで居た人間が、みんな眼を明いて生き返えり、

『ヤアこれわ面白い！　冥土が俄に明るく成つた。ソレ、みんな起きろ〳〵！』

と、ムク〳〵ムク〳〵起き上り、中にわ大勢手を組んで、面白がつて踊りまわりましたから、その騒ぎわまた大變です。

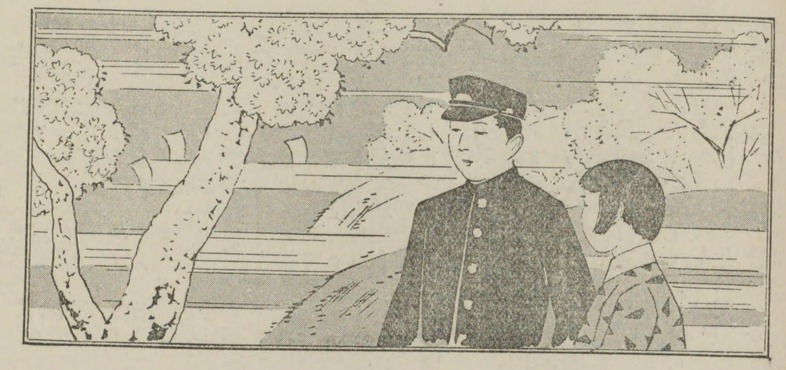
これを早くも聞きつけたのわ、天の神樣の御門番で、見ると眞闇である筈の地の下に、大きなランプの樣なものが光つて居て、今まで靜かに眠つて居た死人が、皆棺桶から踊り出して、ワイ〳〵狂いまわつて居りますから、すぐこの事を神樣に申上げると、神樣わ眉を顰め、

『それわどうも怪しからん事だ。はやく往つてそのランプを取り上げろ！』

と、仰有いますので、門番の神わ畏まつて、直樣下界え飛んで下り、地の下え飛び込んで、

『こりや死人共！　何故そんなに騒ぐのだ。さあ元の通りしづまれ、しづまれ！』

と、叱りつけながら、其所に光つて居る月を取り上げて、天え登つてしまいましたので、死人わまた元の通り、暗い所で靜まり返えつてしまいましたが、其時から月と云うものわ、矢張り日と同じ樣に、天で光る事に成りましたとさ。



母の行方

或る所に夫婦の者が居りまして、その二人の間にわ、三人の子供まで出來て居りました。

その女房わ、至つて働き者で、夫の世話も子供の世話も、まことによく勉めましたが、只一つの瑕わ、お寺參りが大嫌いで、たま〳〵坊さんのお說教を聞くと、直ぐ居眠りをするという風ですから、亭主わ心配して、いろ〳〵說き勸めて居りましたが、何の效驗もなかつたのであります。

ある晩の事でした。親子五人が枕を並べて、例の通り寢て居りますと、やがて眞夜半と思しき頃、末の子が眼をさまして、

『母さん〳〵！』

と、呼びましたが、母わ少しも返事をしませんので、父も起き

て傍を見ますと、如何したものか母の床にわ、枕ばかり殘つて居て、人わ何所え行つたか影も形も見えません。

すると總領の子が起き出して、

『アヽ、そんなら先刻のわ夢ぢやア無かつたのか知らん?』

と、云いますから、父も不審に思いまして、

『それわお前どんな夢を見たんだ?』

と、聞きますと、

『先刻私が見て居たら、何所からか青い衣服を着た小人が、大勢此所え入つて來て、母さんを連れて行つてしまつたんです……』

と、云う事です。

亭主わそれを聞いて肝を潰し、さてわ何所かの魔物が來て、女房をさらつて行つてしまつたのかと、それから人を頼んで、近所の山や森の中を、頻りに探しましたけれども、何うしても見付かりません。此の上わ可哀そうに、魔物に食われてしまつたに相違ない。それだから、不斷からお寺參りをしろとやかましく云つたのに、ちつとも信心をしないものだから、そんな罰が當つたのだ。せめて次の世にわ善く生れて來る様に、よく菩提でも弔つてやろうと、仕方が無しに諦めまして、その後わ三人の子供を相手に、淋しい月日を送る事になりました。

すると、それから四五日經つてからの事です。同じ町に居る産婆さんが、此の家え尋ねて來まして、亭主に會い度いと云いますから、何の用かと聞きますと、

『實わ私わ、お家のお内儀さんにお目に掛つて、お傳言を受けて來たのです。』

と、云いますから、亭主わまづ胸を躍らせ、

『えツ? それぢやア女房わ生きて居りますか……』

『所が生きてる様な、死んでる様な、まことに不思議なお話です。……まア聞いて下ださいまし! ——實わ私わ、昨晩不思議な目に會つたんで御座います。丁度十二時頃でしたろう。私わもう寢ようと思つて居りますと、だしぬけに表を叩いて、直ぐに來て呉れと云う者がありますから、また何所かでお產がある事かと、元より職業の事ですから、急いでその人に付いて行きますと、やがて自分わ馬に乘せられ、何所を何様行つたとも知らない中に、立派な御殿え來たぢや御座いませんか。私わまた、今まで此様な立派な所え、呼ばれた事がありませんから、只マゴ〳〵して居りますと、今度わ奥の一間え連れられましたが、其所にわ美しいお姫様が、今蟲がかぶつた所で、頻りに苦しんでいらつしやいます。其所で私わ、直ぐに襷掛に成つて、お姫様の脊後えまわり、やがての事に玉の様な、可愛い坊ちやんを取り上げまして御座います。それからまた私わ、急いでお湯を使わせて居りますと、その機みに盥のお湯が、一滴眼に入りましたから、ハツと眼を擦りますと、何と不思議でわ御座いませんか。今まで立派な御殿であつたのが、恐ろしく荒れた古寺に成つてしまい、

美しいお姫様だと思つたのわ、氣味の悪い骸骨で、玉の様な坊ちやんわ、小さな髑髏なので御座います。私わもう肝を潰して、只ガタ〳〵慄えて居りますと、先刻呼びに來た人が出て來て……此人も先刻わ人間でしたが、此時見れば矢張り骸骨！　それが私に云いますにわ、――もう用が濟んだから、お前わ此の子を乳母に渡して、はやく家え歸るがよい。――と、云われる言葉を幸いに、私わその坊ちやん……でわ無い、小さな髑髏を、側に出て居た乳母に渡しましたが、その乳母許りわ人間で、而もその顏をよく見ますと、お家のお内儀さんなので御座います。』

『えゝツ？　家の女房がそんな所え？』

『さア……何うして來たかと尋ねましても、魔物が側に居りますので、委しい事を聞く事も出來ず、そのまゝ其所を歸りましたが、其時お內儀さんわ送つて來て、この古寺の門の所で、そつと私に仰有るにわ、――私わ今こんな所で、魔物の乳母に使われて居るが、此儘てわ婆婆え歸つて、戀しい良人や子供の顏を、二度と見る事わ出來ません。けれども此次の金曜日に、私わこの坊ちやんを連れて、向うの山えお宮參りに行きますから、其時良人が途中に居て、うまく私の腕を摑んでくれゝば、それで私わ助かつて、再び娑婆え歸れるのですから、良人にこの事を、よく〳〵話して下ださい。――と、こう云うお傳言なんでした。』

と、產婆さんの委しい話に、亭主わ大きに力を得まして、

『オ、、それわ何の譯も無い事です。でわ金曜日にわ出掛けて行つて、女房を連れて歸りましょう。だが一人でわ氣味が悪いから、お前さんお氣の毒ですが、案內がてら一所に行つて下ださらんか？』

と、賴みますと、產婆さんも親切に、

『それでわ御一所に參りましょう。』

と、此所に約束が出來ましたから、亭主わ勇み立つて、金曜日を待ちかまえて居りました。

やがて金曜日になりますと、亭主わ身支度をして、產婆さんに案內を賴み、三人の子供も一所に連れて、魔物がお宮參りにゆくと云う、お山をさして登つてゆきました。

で、今か〳〵と待つて居りますと、やがてシト〳〵と云う足音が、段々近く聞えて來ましたが、元より魔物の行列ですから、人間の眼にわ少しも見えず、何所に女房が居るのか、ちつとも此方にわ解りません。亭主わ大いに弱りました。

所が、女房の方からわ、人間の居るのが解ると見えて、

『エヘン！　〳〵！』

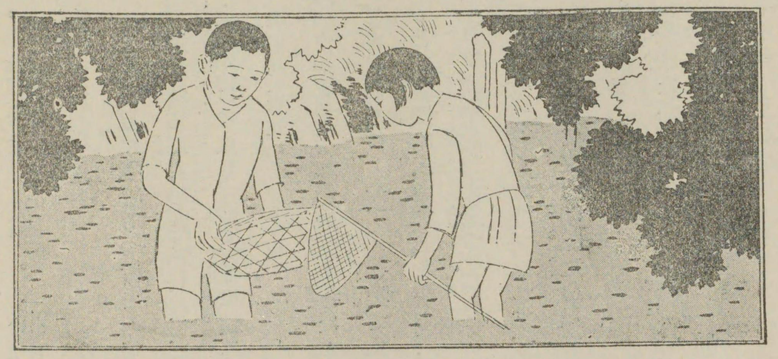
と、咳拂をしましたから、その聲を的に、亭主わつか〳〵と進みよつて、いきなり手を出してつかみました。

するとその摑んだのが、運よくも女房の腕でありまして來ましたから、子供達まで早くも見付けて、

『ア、母さんが、母さんが！』

と、右左から取りつきました。

母もまた嬉しそうに、今まで大切に抱えて居た髑髏を、思わず落しましたら、それと一所に今までわ少しも見えなかつた骸骨共が、一度に正體を現わして、忙てゝ落ちた髑髏を拾うと、骨をカラ〳〵鳴しながら、互いに押し合い擦り合いして、山の方え逃げて行つた限り、再び姿を見せません。其後で親子五人わ、喜び勇んで家え歸りましたが、其時からこの女房わ、急に大の信心家に成り、お寺參りにも精を出して、眞の善い女に成りましたとさ。



羊の角

む

かし或る町に、長左衛門と云う分限者と、そのまた家の裏に、半兵衛という貧乏人とが住んで居りました。

ある年の大晦日の晩の事です。至つて見すぼらしい姿をした、二人連れの順禮が、この町え入つて來ましたが、まづ長左衛門の家の前に立つて、

『これわ行き暮れた旅の者で御座いますが、生憎一文も持ち合せませんで、旅籠を取る事が出來ません。何卒恐れ入りますが、一と晩御泊めなすつて下ださいまし！』

と、憐れな聲をして頼みました。

主人の長左衛門わ、奥でこの聲を聞きましたが、

『なんだ汚らしい巡禮奴！　そんな奴にかまつてる間わ無い。今

日を全體何日だと思う。一年中でも一番大切な、大晦日と云うのを知らないのか。五月蠅い奴だ、追拂つてしまえ！』

と、邪見に呶鳴りつけまして、店の者に追い立てさせました。

追われて二人の順禮わ、すご〳〵長左衛門の家を出ましたが、今度わ路次の奥え來て、半兵衛の家の門口に立ち、前の様に頼みますと、主人の半兵衛わ、丁度今仕事から歸つて、足を洗つて居る所でしたが、

『ヤレ〳〵それわお氣の毒な！　見られる通り私の家わ、こんな狹いあばら屋だが、それでも其方てかまわなけりやア、幾晩でも泊つて行かつしやい！』

と、親切に云いましたから、順禮わ大喜びで、やがて家え入つて見ますと、女房もまた善い人で、

『さア何卒此方え上つて下ださい！　何もありませんけども、今御飯を上げますから。』

と、やさしく云つてくれますので、二人わ其儘奥に通つて居ました。其中に御飯に成つて、自分の前え持つて來た御馳走を見ますと、貧乏世帶に似合わない、羊の肉でありますから、二人の順禮わ驚きまして、

『失禮ながらこの羊わ、何所でお求めに成りました？』

と、聞きますと、半兵衛わ答えて、

『イヤ、こんな貧乏人だから、わざ〳〵買つたものわ出されないが、丁度自家に飼つてあつたから、今つぶして料理したばかりさ。さア遠慮なくやつて下ださい！』

と、云いますので、二人わ感心して、

『それわ〳〵！　まことに有難いお志で御座います。でわ御遠慮なくいたゞきましよう。』

と、元より腹の空いて居る所ですから、咽喉を鳴らして食べてしまいました。

すると今度わ女房が出て來て、

『さア、御飯が濟みましたら、何時でも寢んで下ださいよ。汚いけども、此所に寢床を取つてありますから。』

と、云つて二人を案内しましたのわ、平常半兵衛夫婦の寢る部屋です。

此所を順禮に明け渡してしまつて、二人わ何所に寢るのかと思いましたら、今まで羊の飼つてあつた小屋え行つて、其所に藁を敷きまして、その中で寢て居りました。

さて、夜が明けますと、順禮わ主人夫婦に向い、

『昨晩わどうもとんだ御厄介になりました。ついてわ何か御禮を致すのですが、御覽の通り乞食も同然で、何も差上げる物が御座いません。その代り是からわ、お前さん方の御運を祈りましよう。』

と、一人が云えば、また一人が、

『付いてわ伺いますが、あの昨晩御馳走になりました、羊の角わ何本御座いました？』

と、聞きますので、

『ハイ、あれわ只の羊ですから、矢張り角わ二本でしたよ。』

と、云いますと、二人わ何か點頭きあつて、

『オヽ、それでわその角の數だけ、是から二つの御望を、必ずかなう様にしてあげましよう。』

と、云うかと思うと順禮の姿わ、かき消す様に見えなくなつてしまいました。

あとで主人わ女房と一所に、暫らくわあきれて居りましたが、

『何しろ不思議な客を泊めたものだ。あの言葉が眞實なら、是から二人とも運が開くだろう。付いてわ羊の角の數だけ、二つの望をかなえてくれると云うのだから、何か望んで見ようぢやないか。』

と、考えて見ましたが、元より慾の無い夫婦ですから、

『こうして二人が仲よく暮らして、後に極樂え行けさえすれば、もう他の望わ無いネ。』

と、こんな事を云つて居りました。

すると、不思議でわありませんか。此の元日からと云うものわ、此の家の運がどん〳〵好くなつて來て、その年の暮までにわ、まるで見ちがえる位な、豊かな家になつてしまいました。これも皆去年の大晦日に、二人の順禮を泊めてやつたからの事だと、この評判が八方に聞えますと、長左衛門わこれを聞いて、

『あゝ、そう云う事ならば、自家で泊めてやつたものを。』

と、今さら羨やましくてたまりません。

所え、丁度また大晦日の事で、去年來た様な順禮が、二人連れで通りかゝりましたから、今度わ此方から呼び止めまして、無理に奥え通し、それから飼つてある羊を殺して、たらふく御馳走をして揚句、取つておきの絹夜具まで出して、二人を泊めてやりました。

さて翌朝になりますと、順禮わ案の定禮を云いながら、

『昨晩御馳走になりました、羊の角わ何本御座いました?』

と、聞きますから、長左衛門わ此處ぞと思つて、

『イヤ、あの羊わ珍らしい羊で、平常大切に飼つてあるのを、お前方だから特別を以て、わざ〳〵料理して上げたのだ。それで只の羊なら、角わ二本に極つたものだが、あれわ特別の羊だけに、角が都合四本あつたよ。』

と、好い加減な事を云いました。

これわ二本の角でさえ、半兵衛の様に幸福に成るのだから、若し四本と云つたなら、あの倍の運が向くだろうと、慾張つた了簡から云つたのです。けれども順禮わ眞顔で受けて、

『それでわ昨晩からの御禮に、お前さん方の望を、四つまで必ず叶えてあげましよう。』

と、云うかと思うと二人共、又何所えか行つてしまいました。

あとに長左衛門わ女房を呼び出して、

『さアもう占めたぞ。裏の半兵衛にわ、二度しか望を聞いてやらないが、私等にやア四度まで聞く

とさア。』

と、云いますので、女房わ大喜びで、

『それぢやア私から望みますよ。』

と、云うと、長左衛門わ急いで止めて、

『待て〳〵、乃公が主人だから乃公から望む。』

『いゝえ、私から望まして下ださい！』

『イヤ、黙つてろ！　乃公が望むんだ。』

『なんの私が……。』

『うんにや乃公が……。』

と、夫婦喧嘩を初めましたが、此時亭主わ腹の中で、

『ア、五月蠅い女房だ。いつそ何所えか行つてくれりやアいゝのに！』

と、思いますと、その望わ忽ち叶つて、今まで金切聲を立てゝ居た女房わ、フイと見えなくなつてしまいました。

其間に長左衛門わ、

『あゝお金が澤山欲しい！』

と、望みますと、その望もすぐかなつて、見て居る中に眼の前に、大きな金の山が出來ましたから、

『これわ有難い〳〵！　あゝこの金の澤山ある所を、女房にも見せてやり度いものだ。』

と、思いますと、この望もまた叶つて、一旦消えた女房わ、また元の座に返つて來ました。

すると女房わこの金を見て、さぞ喜ぶだろうと思いの外、いきなり長左衛門の胸倉を取つて、

『お前さんわ酷い人だ。私の居ない中に勝手に望んで、そんなに金を積みあげて、自分許りのものにしようと思うんでしよう。そんな不人情な事をしたつて、誰がお前さんにやるもんですか。』

と、云うかと思うと金の山わ、まるで雪の解ける様に、皆消えてなくなつてしまいました。

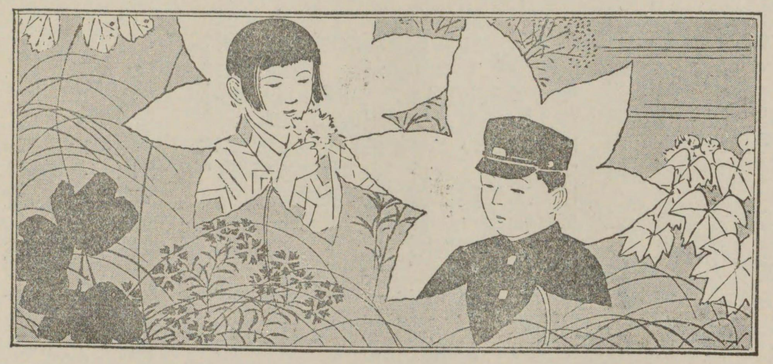
そこで二人わ驚いて、

『折角望んで取つたものを、つまらない喧嘩をして、失してしまつてわ役に立たない。』

と、初めて氣がついたものですから、それからわ急に氣を揃えて、

『ア、今まであつたお金の山が、もう一度此所に出來るように！』

と、いくら望んで見ましても、初め約束の四度分わ、二人で望んでしまいましたから、もう少し も効驗がありません。却つてこの長左衛門の家わ、この年の中に段々貧乏して、とう〳〵身代限りをしてしまいました。それに引かえて半兵衛の家わ、猶年々に榮え〳〵て、しまいにわ町一番の長者になりすまし、兼て二人で望んだ通り、一生仲よく暮した上に、後にわ極樂に行きました。



裸の小人

ある所に靴屋がありました。至つて正直な、そして仕事にも精を出す男でしたが、何う云うものか段々貧乏して、遂にわ只一足の靴を拵える丈の、少し許りの革より殘らなく成りました。

そこで靴屋わ、この革をちやんと裁つて、明日わ朝から靴に拵えようと、仕事場の臺の上に置いて、その晩わ寢てしまいましたが、翌朝になりまして、昨日の革を縫おうとしますと、何と不思議でわありませんか。その革わ何時の間にか、ちやんと靴に成つて居ります。

はて不思議なと思つて居りますと、やがて一人の客が來て、その靴を高く買つてゆきましたが、その金でまた革を仕込みました

ら、今度わ二足分の革が買えました。

そこでまたその革を、ちやんと二足の靴に裁つて、明日わ縫おうと思いながら、晩にわ寝てしまいますと、朝に成ればまた昨日の様に、その革が何時の間にやら、立派な二足の靴に成つて居ります。

所え客が二人來まして、その二足を高く買つて行きましたので、その金で革を仕込みに行きますと、革わ四足分買えるのです。

で、それを四足分に裁つて、仕事わ明日の事にして、其晩わ寝てしまいますと、翌朝にわもうその革が、四足の靴に成つて居るでわありませんか。

こういう事が毎日で、何日でも裁つた許りの革が、夜の中に靴に成つて居て、それが翌日にわ皆賣れてしまい、段々多くの革が仕込まれゝば、段々多くの金が儲かつて、あれ程貧乏して居た靴屋が、今でわ大分工面がよくなりました。

が、それにつけても不思議で成らないのわ、革が朝までに靴に成つて居る事です。

『全體これわ何う云う譯だろう。何時の間に何所の何者が來て、靴に拵えて行くのだろう。』

と、思うと、さあ默つてわ居られません。

其所で靴屋わ、女房とも相談して、何でも其の不思議を見屆けようと、或晩仕事場に燈火をつけたまゝ、自分達わ寢た風をして、そつと覗いて居りました。

すると、やがて眞夜半頃、何所からともなく二人が、圓裸で入つて來て、其所にある革を取ると、一所懸命に仕事を始め、やがて立派な靴に拵えあげて、其儘何所え か歸つて行きますから、

『さてわ此間からの靴わ、皆あの小人達で拵えてくれたのか。誰も賴みもしないのに、精出して助けてくれて、ほんとに有難い事だつた。が、それにしてもあの二人わ、何で裸で居るのだろう。ほんとに、この寒いのに氣の毒ぢや無いか。よし、それでわ靴を拵えてくれるお禮に、此方からわ着物を拵えて、あの二人に着せてやろう。』

と、こう靴屋わ考えますと、それから女房に云いつけて、小さな着物を二人前仕立て、それを仕事場に置いたまゝ、その晩も亦寢た風をして、次の間から覗いて居りました。

所え二人の小人わ、また裸でやつて來ましたが、この着物のあるのを見ますと、踊り上つて嬉しがり、早速これを着ましたが、不思議な事にわ此の小人わ、着物を着ると大層元氣付いて、仕事が急に速くなつて、見る〳〵中に千足の靴を仕上げ、

『これで當分休めるわ、靴屋さん萬歳々々！』

と、云いながら又踊り上り、踊りながら宙を飛んで、また何所えか行つてしまいました。

この體に靴屋夫婦も、大層喜んで居りましたが、その翌晩からわ、もう小人わ來ませんでした。

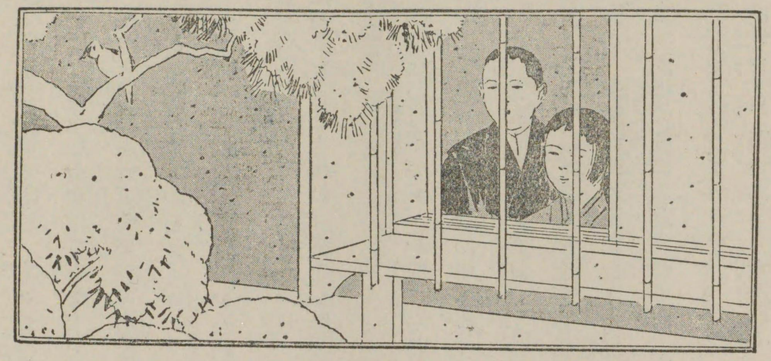
けれども拵えて置いた靴わ、千足が千足とも、皆上等な品ばかりでしたから、これが又高く賣れまして、この正直な靴屋わ、忽ち大層な金持に成りましたとさ。

コケコウ王

むかし或る國の王様に、至つて吝嗇な、その上情知らずの方が入らつしやいました。

その御殿に、一羽の雞が飼つてありましたが、もう大分年を取つて、方々の毛がぬけはじめ、その上聲も惡くなりましたので、王様わ邪魔物に思召し、果てわ餌を少しもあてがわず、出てゆけがしになさいます。

それでも雞わ、他の禽や鳥の様に、山や林え行つて、巢を作る事も出來ませんから、仕方がなしに辛抱して、御殿の裏の小屋の隅に、小さくなつて居りましたが、餌わ自分で探さなければなりませんので、毎日野え出たり、山え行つたり、或わ町を廻つたりして、乞食同様に暮らして居りました。



ある日の事で鶏わ、方々食物を探し歩いた揚句、夕方御殿え歸ろうとしますと、その途中で狐が一匹、彼方からやつて來まして、

『ヤア鶏さんひどく弱つてる樣だが、全體何所え行くんだ?』

と、聞きますから、

『王樣が吝嗇で、私に餌をくれなく成つたから、それで毎日乞食に出るんだよ。』

と、云いますと、

『ヤレ〳〵それわ可哀そうに、てわ何うだい、私が加勢をしてやるから、一所に連れて行かないか!』

『それわ有難いが、お前さんの樣に大きな物を、何うして私が連れて行かれよう。若しかお前さんが見て居る前で、蚤にでも成つて呉れたら、羽根の間に入れて連れて行くが……』

と、云うと、狐わ點頭いて、

『よろしい……それぢやア蚤に成つてやろう。』

と、一跳ね跳ね上つたかと思うと、もう小さな蚤になつてしまいましたから、鶏わ喜んで、その儘羽根の間に入れてやりました。

それからまた少し行きますと、今度わ一匹の狼が來まして、

『コレ〳〵鶏さん! 大層弱つた顏をして、全體何所え行つたんだ?』

と、同じ樣な事を聞きます。

『王樣が吝で餌をくれないから、方々乞食をしに行つたんだ。』

『ヤレ〳〵それわ可哀そうに。でわお前の加勢をしてやるから、私を一所に連れて行かないか!』

『それわ有難いが、そんな恐い顏をして居てわ、一所に連れて行く事が出來ない。せめて蚤にでも化けてくれゝば、譯なく連れて行けるんだが……』

『冗談云つちやいけないぜ。おれの樣な獸が、何うして蚤なんぞに化けられる?』

『所が先刻も狐さんが、お前の樣な事を云うから、蚤に成つてくれつて賴んだら、直ぐと蚤に成つちまつたぜ。』

『ナニ、狐が蚤に成つた? そんならこの狼だつて、蚤に成れない事わあるまい。』

『そうとも〳〵。だから早く蚤に成つてくれ!』

『よし、それぢやア今成るよ。』

と、一跳ねでこれも亦、小さな蚤に成つてしまいました。そこで鶏わこの蚤も羽根の間え入れて、また出かけますと、今度わ熊が一匹出て來ましたから、

そうして又この熊が、前と同じ樣な事を聞いて、同じ樣な事を云つた揚句、鶏が、

『その御親切わ有難いが、何しろそんな大きな身體をして居られちやア、一所に行き度くも行かれないぢやア無いか。』

『そんなら、どうすりやアいゝんだ?』
『小さな蚤になつとくれな!』
『蚤に? 馬鹿な事云つちや困るぜ。こんな大きな身體の熊が、何うして蚤なんぞに成れる?』
『イヤ、そんな心配わ入らないよ。先刻から狐や狼さんも蚤に成つて、ちやんと私の羽根の間に居るんだ。』
『えツ、狐や狼も蚤に成つて、お前の羽根の間に居る? 面白い、それぢやアおれだつて成れない事わあるまい、だが、何うしたら成れるんだ?』
『蚤の眞似をして、ピヨイと跳ねるんだ。』
『それぢや斯うか?』
と、熊わ無器用な身體をしながら、ヒヨイと一つ跳ねましたら、直ぐと蚤に成りましたから、鶏わそれを拾つて、同じ羽根の間におきました。
さて鶏わ、思いがけない三匹の獸を、皆な小さな蚤にして、羽の間に負いましたが、斯う云う加勢が出來たと思うと、大きに氣が強く成りまして、御殿え歸つて來ましても、今までの樣に隅え入つて、小さく成つてわ居りません。
いきなり高い塀の上え飛び上つて、大きく羽叩きしながら、皺枯れた聲を振りしぼつて、王樣の惡口をはじめました。

『コケコウコ、コケコウコ、
王樣冠かぶるなら、
鶏も冠かぶつてる。
それに王樣意地惡く、
鶏を嫌つて追い立てる。』
と、幾度も繰り返して歌うのです。
すると、王樣わこれをお聞きに成つて、殊の外の御立腹、
『何だと! 死損いの老耄鶏めが、無禮な事をぬかし居る。ソレ、引捕えて締め殺せ!』
と、仰有いましたが、御家來の人々わ、常から此の鶏の事を、可哀そうだと思つて居る所ですから、なんぼ王樣のお言葉でも、そんな酷たらしい事わしません。只鶏を叱るばかりで、そのまゝ鶏小屋え追い込みました。
所がその翌日、夜が明けるか明けない中に、鶏わまた聲をはりあげて、

『コケコウコ、コケコウコ、
王樣冠かぶるなら、
鶏も冠かぶつてる。
それに王樣意地惡く、

鶏を嫌つて追い立てる。』

と、歌いましたから、王様わもうたまらなく成つて、いきなり御家來に鶏を捕えさせ、それから馬小屋の中に投り込ませておしまいなさいました。これわ馬に踏み殺させようと思つたのです。

馬小屋の中の馬わ、面白がつて足をあげ、いきなり鶏を蹴飛ばそうとしますと、鶏わはやくも體をかわしながら、

『熊さん！　早く出ておくれ！』

と、云いますと蚤に成つて居た熊わ、忽ち正體を現わして、羽根の間から躍り出し、驚き騒ぐ馬の横面を、平手でピシヤリと喰わしましたら、馬わ長い顔を二つに折られて、其まゝ死んでしまいました。

其あとで鶏わ、小屋の屋根え飛んであがつて、さも凱歌でも唱えるように、例の歌をはじめましたから、王様わまたお怒りになつて、今度わこの鶏を、牛小屋の中えお入れになりました、これわ牛の角で突き殺させる爲めです。

所が、鶏わ驚きません。勢込んで突いて來る牛を、體をかわしてやり過しながら、

『狼さん〳〵！　はやく出て助けておくれ！』

と、云いますと、蚤に化けていた狼わ、羽根の間から躍り出して、いきなり牛の咽笛に喰いつき、見事に其所え斃してしまいました。

その後で鶏わ、また牛小屋の屋根に乘つて、

『コケコウコ、コケコウコ、
　王様冠かぶるなら、
鶏も冠かぶつてる。
　それに王様意地悪く、
鶏を嫌つて追い立てる。』

と、高らかに歌い立てました。

一度ならず二度までも、殺させようとした馬や牛が、却つて鶏の爲めに殺されて、何の役にも立ちませんから、王様も今度わ思案をお代えに成り、なまじ他の獸を使うより、同じ鶏仲間にやつて、思うさま苛めてやるが一番だと、今度わ若い氣の強い、牡鶏の居る所え、この老年の鶏を追い込み、皆でいぢめる様にさせました。

若い牡鶏達わ、今わ見る影も無い程老耄れた、この鶏を見ますと、寄つてたかつて玩弄物にして、嘴で突くやら、爪で蹴るやら、いろ〳〵にして苛めようとします。

すると、蚤に成つて居た狐わ、羽根の間から聲をかけて、

『オイ〳〵鶏さん！　おれが加勢に出てやろうか？』

と、云います。

鶏わ考えましたが、

『そうだねエ、おなじ仲間の事だから、大抵なら辛抱して、免してやろうと思つたが、あんまり亂暴が過ぎる様だから、矢張りお前に出て貰おうかな。』

『よし、それぢやア直ぐに飛び出すよ。』

と、云うかと思うと、羽根の間の蚤わ、忽ち狐の正躰を現わし、

『おのれッ！』

と、云いさま、群がる牡鶏の中に飛び込み、當るを幸い、喰い締め、嚙み倒し、見る〳〵中に十五六羽を、殘らず其場で食つてしまい、

『イヤ、これわ御馳走だつた。』

と、其儘山の方え逃げて行つてしまいました。

その後で以前の鶏わ、この鶏小屋を我物顔に、悠々と歩きまわりながら、又しても例の歌を、聲張りあげて歌いますと、王様わまた聞き咎めて、直に此場えお出でになりましたが、見るとあれほど居た若鶏わ、一羽殘らず食い盡されて、この老耄の鶏ばかりで、獨り威張つて居りますので、此上わもう勘辨ならぬと、お側の御家來の止めるのも聞かず、スルリと劍を拔きはなし、逃げ廻る鶏を追いつめて、とう〳〵首を切つておしまいなさいました。

御家來わ驚きながら、

『とう〳〵御成敗なさいましたか、不憫な奴で御座いますな。』

と、云いますと、

『何が不憫な事があろう。老耄れの癖に惡口ばかり達者で、おれの惡口なぞ吐すから、この通り致したのぢや。』

『それでわせめて此の屍骸わ、何れえか葬りまして、墓でも立てゝやりましよう。』

『馬鹿な事を申すな！　あの様な不埒な奴を、丁寧に葬るにわ及ばん事ぢや。それよりもこの屍骸わ、おれの腹に葬つてやる。直ぐさま料理致して來い！』

と、御家來が申し上げても、ケチな王様なか〳〵お聞入がない。

『イヤ、其様な事を申して、其方達が食おうと致しても、その手わ食わんぞ。何でもその屍骸を料理して食わせろ！　そうして頭から足の先まで、食つて〳〵食い盡してやらねば、この腹が癒えんのぢや。』

と、仰有いますので、御家來も仕方が無く、やがてこの鶏を料理して、肉わ燒いたり、煮たり、揚げたり、また骨わスウプに煎じて、夕方の御膳に出しますと、王様わ御滿足で、

『あの憎い鶏だが、食うて見ると割に旨いぞ。』

と、舌皷を打ちながら、残らず食べておしまいになりました。

すると、その翌朝の事です。漸く東が白む頃に、王様のお寢間の方で、たしかに彼の鶏の聲で、

『コケコウコ、コケコウコ！』

と、時を告げるのが聞えますから、御家來わ不思議に思つて、そつとお寢間を覗いて見ますと、なんと不思議でわありませんか、王様が大きな口を開けると、その口から鶏が首を出して、コケコウコと鳴いて居るのです。

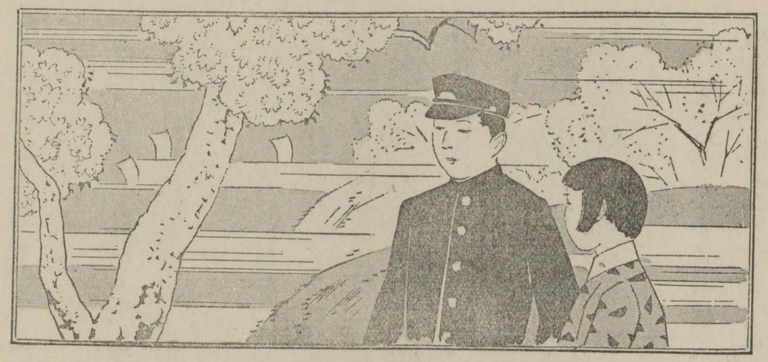
御家來共わ肝を潰して、

『王様、何う遊ばしたので御座います？』

と、云いながらお側え寄つても、王様わ只鶏の首から、コケコウ〳〵云うばかりで、他に何も仰有る事が出來ません。

これというのも王様が、あんまり鶏を邪慳にした報いで、今度わ御自身が鶏に成つてしまつたのです。

さればこそこの王様わ、コケコウ王と呼ばれまして、世にも浅ましい評判を、それからそれえと歌われました。



姫の一言

昔、西施とやらいう美人わ、兎角青梅をかじるが好きで、絶えず眉を寄せて居たとやら。こゝに東家の息女紅姫と云うわ、生れ付いての氣隨者。その御機嫌の直ぐな時にわ、箸のこけたのにも腹を抱えさせられるが、これが斜に傾くが最後、お氣に入りの乳母お酉が、剽輕な歌を謡い出しても、滅多に笑靨も見せられぬ許りか、玉の額に翡翠の痛筋を立てゝ、じつと花の唇を結んでわ、雷が鳴つても白い齒わ見せない。

去る程に、去年の暮も押しつまつて、お出入の呉服店から、仕立て上つて來た春のお召の、御題にちなんだ雪の松が、模様に誂えとちがつた所があつて、地色も思つたより薄過ぎたのが、例の癪の虫を怒らせ、着るの着ぬの、裂くの、破るのと、さん〳〵に

むづかつた揚句が、やがて一夜明けたと成つても、夜着の襟を咬んだまゝ、如何にしても床を離れたまわず。

お酉が辛くも助け起して、漸くお雑煮だけわ祝わせられたが、父なる殿に對しても、『おめで度う』一つ仰せられぬばかりか、用事も頤の先ばかりで知らせ、口をさつぱりお利きがない。

父上の戯れに、

『其方わ唖に成つたのか？』

と、仰有つたのを、これぱかりわ聞える耳の、そのまゝ頭でうなづかれたが、さアそれからわ猶口を結んで、いつかな物を云わるればこそ！

お側の者わ氣が氣でなく、何とか御機嫌を取り直そうと、羽子板を出したり、手毬を持たせたり、あるいわピンホン、トランプ、歌留多と、さまざまに心を碎いたが、萬更斥けもなさらぬながら、さりとて例の無言の行わ、堅く守つて動かれぬ氣むづかしさ。

果わ御殿中わ云うも更なり、お出入の者、見知り聞き傳えて、それからそれえと噂する程に、果わ東家の紅姫、多年氣隨の報いによつて、遂に唖に成られたとの評判、今にも新聞に出るべくなつた。

殿も今わ棄てゝもおかれず、

『これ姫！　戯談もゝうよい加減にせんか！　物眞似にも事を缺いて、淺ましい唖の眞似とわ、姫御前の身にあられもない。はよう口を開いて見せい、はよう物を云うて聞かせい！』

と、頼む樣に仰せられたが、さて何の答もなく、姫わ只頭を振つて、ア、ア、オ、オ、云う所わ、どうやら眞の唖らしくも見える。

人々の心配わ一方ならず、さてわ苟且の物眞似が、所謂習の性と成つて、これわ眞物の唖に成られたか。さりとわ御自身も、云い度い事まで云う事成らず、定めて御不自由な事であろう。アラおいとしや、兎も角も、藥、呪咀の力を假りて、あのお口を開かせようと、まづ御殿え召されたのわ、御出入の醫者竹齋であつた。

竹齋わ畏まつて、仔細らしく診察を遂げ、さて何事も心得顔に、處方を作つて藥劑を進めたが、とんとその効驗が無い。

次に旦那寺の和尚天空、篤と姫の容態を覗い、眞言祕密の修法に依て、何やら呪咀をした樣であつたが、それでも利益わ更に見えず。姫の口わ依然として結ばれ、言わ唇を出ぬのである。

今わ殿も途方に暮れて、殆んど半ば〻狂せん許り。此上わ是非に及ばず、誰にもあれこの姫に、物を云わせる手段を知る者わ、遠慮なく施こしてくれ！　見事その効を奏するに於てわ、褒美わその者の望み次第。時宜に依てわ姫の婿に、迎え取るも苦しからずと、遍ねく世に觸れさせた。

それを聞くと、國々の若者、我こそその口を開かせん、彼に物を云わせて見せんと、先を爭い名乗つて出で、件の唖の姫の前に、樣々の身振をしてわ、これに笑いを催させて、また種々の問をか

けてわ、その答えを云わせようと、しきりに工夫を凝らしたが、さてそれも皆駄目であつた。

すると、茲にこの御殿の、庭作りの爺の伜に、雪藏と云う若者があつたが、何か心に默頭くと、後走に御前え進み出て、

『恐れながらお姫樣にわ、私がお口をお利かせ申ましよう。』

と申出た。

『誰かと思えば雪藏か！　其力わ木に花を咲かす事わ知つても、唖に物を云わす事わなるまい。』

と、殿も一時わ尽けられたが、物わ試し、念の爲めと、兎も角も姫の前え召された。その時雪藏わ恐れ氣も無く、つく〳〵と姫の顏を見上げて、

『はてさてお傷ましい事で御座ります。この御容貌がありながら、生れもつかぬ唖にお成りとわ！まだ十九や二十のお年で……』

と、云いもまだ終らぬに、見る〳〵姫わ顏を赤らめ、忽ち口を開くと見る間に、

『コレ雪藏、失禮な！　私わまだ十七だよ。』

かくて姫わ元の通り、再び物を云う樣になつた。

然し雪藏をその婿にとわ、誰が何と云つても聞かない。

馬の春衣

年の暮のことでありました。ある有福の家でわ、主人夫婦を初めとして、隱居も子供も皆別莊の方え。避寒に行つてしまいましたから、家にわ女中や下男ばかりが、留守番をして居たのです。

すると或晩のことです。この女中や下男達が、もう寢靜まつて居りますと、何者とも知れず臺所え來て、戸をコト〳〵云わせて居りましたが、やがて中え入つて來たと見えて、ミシリ〳〵と云う足音が聞えます。

女中のお綱が目を覺まして、

『オヤ盜人ぢやアないか知ら……盜人ですよ〳〵！』

と、隣に寢て居る朋輩のお鞍を起しますと、お鞍わ寢惚けながら

ら、

『ナニ、盜人だツて？　そんならうつかり出ない方がいゝ、うつかり出ると怪我をするよ。桑原桑原！』

と、蒲團を素被つてしまいました。

その中に臺所の方でわ、ジヤア〳〵と云う水の音や、ガチヤン〳〵と云う皿、小鉢の音が、頻りに聞えて來ましたが、足音わ其邊ばかりにして、奥の方え來る樣子わありません。けれども氣味が悪いので、女中達わ少しも眠られませんでしたが、皿、小鉢や水の音わ、殆んど一晩中聞えて居て、やがて夜が明けそうに成ると、其儘音も聞えなくなりました。

さて朝になりましてから、恐々臺所え行つて見ますと、皿、小鉢わ一つも無く成つて居ない斗りか、宵に汚れたまゝであつた物さえ、皆奇麗に洗つてあるのです。

『まア不思議ぢやアありませんか、何と云う盜人でしよう？』

『ほんとに好事な盜人ねエ。だが、こうして奇麗に洗つて置いて、それから持つて行く心算かも知れないから、今夜わ用心して居ましよう。』

と、女中達わまた此事を、下男の午助に話しますと、午助わ夫れも聞きまして、

『夫わどうも飛だ事だ、こうして旦那樣も奥樣も、皆御留守に成つて居る間わ、云わば乃公達が此家の主だ。それに、その主に斷りも無く、勝手に人の臺所え來て、皿、小鉢を玩具にするとわ、何と、云う太い奴だろう。よし、今夜わ乃公が不寢番をして、その盜人をふん縛つてやろう。』

と、非常な意氣込で、その晩わ宵から六尺棒を持つて、臺所の隅に隱れて、盜人の來るのを待つて居りました。

その中に夜が更けて、奥の時計が二時を打ちますと、彼方の戸口がコト〳〵云い出します。

『來たぞ〳〵！　今に見ろ、撲ちのめしてくれるぞ。』

と、午助わ手に繩をかけて待つて居ましたが、やがてその戸口が明いて、スウツと入つて來た奴を見ますと、盜人と思いの他、一匹の黒い裸馬ですから、午助わギヨツとして、

『何だありやア馬ぢやア無いか！　何處からこんな物が舞い込んだろう？』

と、また隱れて見て居りました。

馬わ又それとも知らず、ミシリ〳〵と入つて來て、まづ鼻で戸棚を明け、其處にあつた皿、小鉢を見ると、今度わまるで人間の樣に、前脚二本を手の樣に働かして、その皿、小鉢を抱え出し、洗槽元え運んで行つてわ、まるで女中達のする樣に、それを一々洗い始めました。ガチヤン〳〵、ジヤア〳〵とわ、その時聞える音なのであります。

午助わまるで夢心地、只ボンヤリ見て居りますと、馬わ精出して洗物をすると、またそれを戸棚にかたづけ、

『ヤレ〳〵、これで今夜わ濟んだ。だが、用が濟んでしまつたら、急に寒氣が感じて來た。もう直

きに正月だと云うのに、まだ乃公わ丸裸……あゝ春衣が一枚欲しいなア。』

と、溜息をついたと思うと、其まゝ何處えか消えてなくなりました。途端に納屋でわコケコツコウ！　もう夜が明けて來るのです。

すると女中部屋の方から、お綱とお鞍がやつて來まして、

『午助どん！　何うお仕だエ？』

と、聞きますから、午助わ初めて正氣付いて、

『イヤ何うも不思議だ〳〵！　あんな不思議わ見たことが無エ。』

と、夜半からの事を話して聞かせますと、女中達わ顔を見合せて、

『まアそれぢやア盜人ぢやア無くつて……。』

『裸馬だつたのかねエ。』

『それにしてもその馬が、よく人間の樣に働けるぢやア無いか。』

『何でも只の馬ぢやア無いのに、何故お前さん捕えて見ないんだねエ？』

と、云われて午助も頭を掻き、

『おうきに其奴わ私がぬかつた。ぢやア今夜も又くるだろうから、今度こそ捕えて、何者だかよく聞いてやろう。』

と、元より主人夫婦わ留守で、別に用事もありませんから、下男も女中も、その事ばかりに掛つてしまいました。

さて其晩になるのを待ち兼ねて、午助わ又臺所の隅に構えて居ますと、丁度昨夜の時刻に、昨夜の戸口から、昨夜の裸馬が入つて來ました。

初めわ默つて見て居りますと、裸馬わ又昨夜の通り、皿、小鉢を洗い始めましたが、それが濟むとまた獨語を云つて、やがて歸つてしまおうとします。

所を午助わ飛び出して行つて、いきなりその鬣をつかまえ、

『コレお前わ全体何者だ？』

と、聞きますと、馬わ別に驚きもせず、同じく人間の聲を出して、

『そう云うのわ午助さんか！　何を隱そう、私も元わお前の仲間で、馬吉と云う下男だつたが、大の大の無精者で、旦那から云いつかつた御用を、いつも碌に仕なかつたので、とう〳〵旦那の御機嫌を損じ、丸裸にして追い出されたが、神樣もまたその罰で、私を生きながら馬にしてしまい、そしてこの臺所で、毎晩皿、小鉢を洗わせなさるんだ。だが此寒氣に丸裸でわ、實につらくつてたまらないよ。』

と、云います。

午助わこれを聞くと、可哀そうに思いまして、

『ヤレ〳〵、それぢやアお前わ馬の軀をして、矢張り下男の用をしてるんだネ。何しろそれわ御苦

労な事だ。』

『それでま𠮟聞いておくれ！　私わこの通り馬に成つてるから、指も何も無い前脚で、人間の通りの事をしなけりや成らないから、どうして尋常の骨折ぢやア無いのさ。』

『だが……その神様の御罰わ、全體何時まで續くんだエ？』

『それわ誰か私の爲めに、春衣を一枚拵えてくれりやアいゝので……その春衣え手を通しさいすりやア、私わ元の人間に成れるんだが、何しろこんな態をして居ちやア、誰も肩を持つちやアくれないからねエ……。』

と、心細そうに云つて居ます所え、鷄がまた鳴き出しましたから、馬わ慌てゝ出て行つてしまいました。

此時例のお綱やお鞍わ、もう寢床から出て居て、初めから馬の話を、半分ほどわ聞いて居りましたが、馬の行つてしまつた後で、更に午助からも詳しく聞きますと、まづお綱の云いますにわ、

『そう云う可哀そうな事ならば、皿、小鉢を洗つてくれたお禮に、私達が春衣を縫つてやろうぢやありませんか。』

と、相談しかけますのを、お鞍わ打ち消しまして、

『何だねエお綱どん！　そんな事してしまつちやア、もう洗いに來ちやアくれないぢや無いか。それよりやアあゝして裸馬で居る間わ、二晩洗いに來てくれたんだから、私達わそのお庇で、大きに

骨が休まると云うものだ。かまわないから放棄つておいて、何日までも洗わしておやりよ！』

と、云います。それでもお綱わ頭を振つて、

『いゝえ〳〵！　それぢやア如何にも可哀そうだから、お前が厭なら私一人で、春衣を拵えてやるからいゝ。』

『お止しと云つたらお止しな！　それより今日から皿、小鉢わ、いくら汚くなつても、此方ぢやア少しも洗わずに置いて、皆あの馬に洗わせてやろうよ。』

『でも、理由を聞いて見ちやア、そんな事わ出來ないからねエ。』

と、二人の女中わ氣が合わず、お互いに膨れた顏で、その日わまるで口も利きませんでした。けれどもお綱わ、馬の裸なのが氣の毒で成りませんから、丁度用の閑なのを幸い、精出して馬の春衣に掛りました。

それに引かえてお鞍の方わ、何うせ馬が來て洗つてくれるものだと、果わ自分達の茶碗や皿まで、汚れたまゝで臺所に置いて、馬の來るのを待つて居たのです。

するとその夜の二時を合圖に、また馬の足音がして、ジヤア〳〵、ガチヤン〳〵と、水や皿、小鉢の音が聞えますので、

『ソレ、今馬が洗つておいてくれる、あゝ樂な奉公だ。』

と、お鞍わ平氣で寢て居りましたが、やがて夜が明けてから、臺所え行つて見ましたら、こわ如

何に？　自分の茶碗わ云うまでも無く、主人の大切な皿小鉢が、皆粉微塵に破つてある斗りか、臺所の板間わ、泥だらけの馬の足痕で、目も當てられない有様です。

お鞍わ眞赤に成つて腹を立て、

『おのれにくい罰當奴！　何だつてこんな惡戯をした？　今夜こそ待ち伏せて居て、骨も何も此通り、粉微塵に撲ちのめしてやるぞ。』

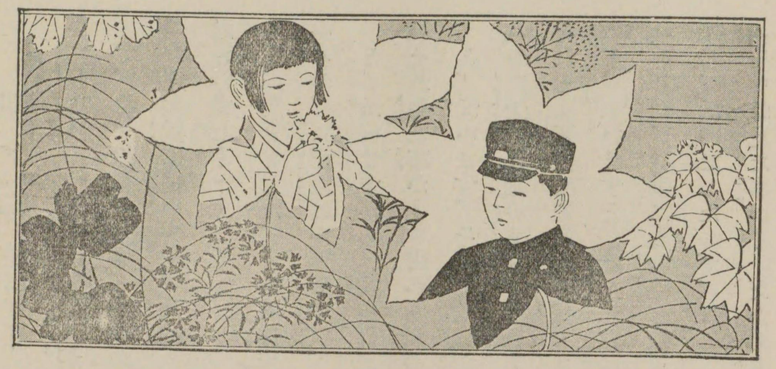
と、午助の持つて居た六尺棒を借りて、夜に成るのを待つて居ました。

其間にお綱わ、春衣を仕立揚げましたから、それを持つて馬の來るのを待つて居ますと、やがて例の時刻に成つて、馬わ入つて來ましたから、お鞍わいきなり六尺棒を持つて、その頭から撲りました。

所がその六尺棒わ、馬の頭に當らないのに、ピシリと折れてしまいましたが、その折片がお鞍に當たると、見る中にお鞍の姿が、居ながら馬に成つてしまつたのです。

不思議わ是ばかりでわありません。この間にお綱が春衣を取つて、手ばやく馬に着せましたから、馬わその儘身を躍らせて、立派な人間に成つてしまいました。

重ね〳〵の不思議に、お綱も午助も呆れて居りますと、今一つ不思議な事にわ、昨夜あれ程損じてあつた、あの皿、小鉢や茶碗などが、皆元の通りの形に成つて、而も奇麗に洗つてありました。



新瘤取物語

むかし〳〵ある田舎に、太郎兵衞と次郎作と云う二人の百姓がありました。隣同士のまことに仲好しでありましたが、或日不圖したことから、二人口論を始めました。

これわ太郎兵衞が、

『何でも人間わ正直で無けりや成らん。正直の頭に神宿るだから。』

と、云うのに、次郎作が頭を振つて、

『なんの、水清ければ魚棲まずだ。そう正直ばかしぢや世渡りが出來ない。』

『いゝえ、それわ間違つてる、何でも人間わ正直が勝だ。』

『いゝや、嘘を吐かなけりやア出世わ出來ない。』

と、互に云い募りましたが、どうもこれでわ論が干ないから、これから二人で行つて、誰かに聞いて見ようぢやないか、それがよかろうと云うので、二人わ連れ立つて家を出ました。

で、まづ最初に來ましたのわ、庄屋の家でありましたが、主の庄屋の顔を見ますと、

『お庄屋様に伺います。全體人間と云うものわ、正直でなけりやア成りますまいか、一つお話し下ださいまし！』

と、聞きました。すると庄屋わ一寸考えて、

『イヤ、只正直ばかりぢやア、人に馬鹿にされるから、矢張り嘘をつかなけりやア成るまい。』

と、云いますから、次郎作わ得意になつて、

『それ見た事か！　だから私の云う通りだ。』

と、云います。それでも太郎兵衛わ承知しません。今度わ武士の所え來て、

『お武士様に伺います。全體人間と申しますものわ、嘘をついても可いもので御座いましようか。それとも正直でなけりや成りますまいか、お說が承り度う御座います。』

と、云いますと、武士わ點頭きまして、

『そりやア戰爭にも計略と云う事があるから、矢張り嘘で無けりやア勝てんなア。』

と、云いましたので、

『そウれ見た事か！　だから私の云うのが本當だ。』

と、次郎作わ威張りましたが、太郎兵衛わまだ腑に落ちませんので、もう一度聞いて見なけりやア解らないと、三度目にわ旦那寺え來て、その和尚に尋ねました。

『和尚様に伺います。全體人間わ正直と嘘と何方が本當で御座いましよう。何卒教えて頂き度う御座います。』

と、云いますと、和尚わニコ〳〵笑いながら、

『イヤ嘘も方便と云うから、矢張り此世わ正直ばかりでわ治まらんわイ。』

と、云いましたので、太郎兵衛わもう落膽して、扨わそう云う世の中かと思いましたが、元より性質が正直なのですから、どうしても嘘わつけません。

それに引かえて次郎作の方わ、根が嘘つきのずるい男でしたから、こうして庄屋も武士も旦那寺の和尚も、皆自分の肩を持つてくれたので、すつかり好い氣に成りまして、それからわ嘘のつき放題、人を誑したり、好い加減な法螺を吹いて、ごまかして世を渡る中に、段々運がよく成つて、大分家が豊になりました。

するとまた太郎兵衛の方わ、何でも正直にばかりするものですから、ちよつともお金が儲からず、遂にわすつかり貧乏して、もう其日の食べる物さえ無くなりました。

そこで仕方がありませんから、次郎作の處え來まして、

『次郎作さん！　次郎作さん！　まことにどうも申譯が無いが、私わこの通りすつかり貧乏しちま

つて、もう今日の食べる物も無いんだ。それに引かえてお前さんわ、大層この頃お金が出來た様だが、少し貸してくれないか！』

と、云いますと、次郎作わせゝら笑い、

『だから私が云わない事ぢやない。お前さんがあんまり正直過ぎるから、それでそんな事に成るんだ。これからわ心を入れかえて、ちつと嘘をつきなさい！』

と、云いますと、太郎兵衛わ頭を掻きながら、

『イヤ、どうも嘘ばかりわつき度く無いからねエ。』

『アレ、まだそんな事云つてるのか、強情な人だなア。よし、それぢやア金を貸してあげるから、その代りにその抵當として、お前さんの目を一つお呉れ！』

『仕方が無い。目を一つあげよう。』

と、此所て太郎兵衛わ次郎作に、お金を貸して貰いましたが、その代りにわ右の眼を、抵當に取られてしまいました。

さて太郎兵衛わ、その貸して貰つた金で、まづ食物を買い、その殘りで商買を初めましたが、それも正直に賣りますから、少しも利益がありません。間もなく一文無しに成りました。

そこで太郎兵衛わ、また次郎作の所え、お金を借りに來ましたので、次郎作わまた貸してわやりましたが、その代りに今度わその抵當として、左の眼も取つてしまいましたから、可哀そうに太郎兵衛わまるで盲目に成つてしまいました。

只さえ正直過ぎて、貧乏しきつて居る太郎兵衛、今度わ盲目に成りましたから、もう何うすることも出來ません。次郎作から借りた金で、二三日わ物を食べることも出來ましたが、後わ路傍に倒れた儘で、饑死を待つばかりであります。

で、太郎兵衛わ草の上に横に成つて、片息に成つて居りますと、誰とも知れず耳の側え來て、

『コレ〳〵太郎兵衛！　お前わほんとに正直者だから、私が好い事を教えてあげよう。是から右え眞直に十町ほど歩いて行くと、そこに大きな岩があつて其所え行つて、まづよく眼をお洗い！　それから岩の後にある、大きな松の木の上に登つて、今夜一晩寢て居ると、屹度幸福な事がある。よいか！　忘れるな！』

と、云うかと思うと何所えか行つてしまいました。

太郎兵衛わ今の話に、また元氣づきまして、それでわ直ぐに行つて見ようと、杖を力にトボ〳〵と、右え眞直に十町ほど行きましたら、成る程大きな岩がありました。

まづその岩に手をかけながら、よく耳を濟しますと、側に水の流れる音が聞えますから、その音を的に摺りよりまして、その水で眼を洗いました。

すると不思議や！　何とも云われない好い心地がして、まるで夜の明けた様に、眼が元の通り明きました。

『ヤレ嬉しや！　さてわ先刻のわ神様のお告か？　有り難い〳〵。』

と、嬉しがつて雀躍しながら、直ぐとまた後の松の木に登り、その上の股の所で、その晩わ此所に泊ることにしました。

其中に日が暮れて、夜が更けて、夜も丑満と思う頃に成りますと、俄に木の下でガヤ〳〵と、賑な聲がしますから、何だろうと覗いて見ましたら、こわ如何に、岩の上にわ赤鬼や青鬼が、大勢寄つて酒宴を始めて居ります。太郎兵衛わ吃驚して、小さく成つて隠れて居りますと、鬼共の云いまいよ。』

すにわ、

『イヤ人間と云う者わ、どうも皆正直で無いものだが、只一人太郎兵衛ばかりわ、何うしてあんなに正直に出來るだろう。あの正直ものならば、この小槌を持たしても、決して慾張つたことわすまいよ。』

と、かねて話に聞いて居た、打出の小槌を取り出して、岩の上にちやんと置き、そのまゝ何處えか行つてしまいました。

さて夜が明けましてから、太郎兵衛わ先づ松の木を下りて、岩の上をよく見ますと、そこに小さな小槌があつて、その側の岩の上にわ、

『鬼が島の打出の小槌、正直太郎兵衛に與うるものなり。』

と、立派に書いてありますから、太郎兵衛わ嬉し喜び、

『さてわこれも神様の賜物だろう。』

と、有り難く推し頂いて、やがてこれを持つて歸つて來ますと、先方からやつて來ましたのわ、例の次郎作でありました。次郎作わ見ると驚いて、

『ヤ、太郎兵衛さん！　お前いつの間に眼が明いた？　そうしてその小槌わ何うしたんだ？』

と、聞きますから、太郎兵衛わ正直に、昨夜から今朝までの事を、殘らず話して聞かせますと、次郎作わ急に羨ましがり。

『そいつわお前さん、甘いことをしたなア。ぢやア私も行つて貰つて來る。』

と、よせばよいのに次郎作わ、また大岩の側え來て、まづその眼を洗いました。

すると今度わまるで燒ける様な疼痛がして、アッと云う間に大切の眼が、忽ち潰れてしまいました。

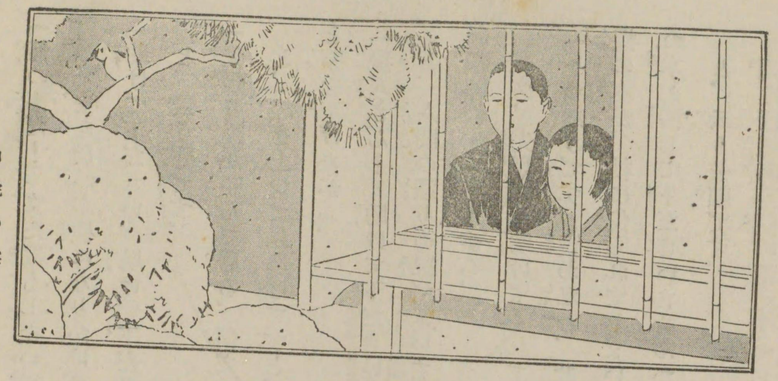
けれども慾わ張つて居ますから、直ぐその後の松の木に登つて、夜に成るのを待つて居ますと、案の定その眞夜中に、鬼が大勢やつて來て、岩の上で酒宴を始めました。

『まてよ。何だか人臭いぞ。人臭い、人臭い！　しかも嘘つきの人間の臭氣だ。ドレ、捕えて酒の下物にしてやれ！』

と、云ううちに飛び上つて、いきなり次郎作を捕えて、みんなで引裂いて食つてしまいました。

それに引かえて太郎兵衛の方わ、打出の小槌を貰いましたから、もう少しも困る事わ無く、まこ

とに豐な世を送りましたとさ。



白蛇の聲

むかし或る處に、一人の獵師が居りました。ある日の事で、獵師わ犬を二匹連れて、山え出かけましたが、ろくに獲物もないので、段々奥深く分け入る中、とう〳〵道に踏み迷つて、どうしても歸れなく成つてしまいました。

仕方がない、今夜わ此所で寢て行こうと、森の中の木の下で、落葉を集めて焚火をし、其中に夜も更けた樣ですから、其邊の木の根を枕に、横になろうとしますと、不意に頭の上で、

『助けて下ださい〳〵！』

と、云う、可愛らしい聲が聞えます。

人里離れた山の中、而もこの夜更に、全體何者が居るのだろうと、起き上つて見廻わしましたが、何處にも人影わ見えません。

『何の事だ！　まだ寢もしないのに、夢でも見たのだろう。』

と、呟きながら横になりかけますと、又しても聞えるのわ。

『助けて下ださい、助けて下ださい！』

と、云う聲です。

『矢張り誰か呼んで居る。何だか此木の上の様だ。』

と、起き上つて見あげますと、例の大きな樅の木の枝から、眞白な可愛らしい蛇が一匹、ブラリと頸を下げながら、

『獵人さん！　助けて下ださい！』

と、人間の通りの聲で云います。

獵師わ吃驚しながら、

『ヤツ、先刻から助けてくれて云つてたのわ、蛇さん！　お前なのか？』

『ハイ然うです。實わ私わ、此樅の木の空洞の中に、年久しく棲んで居る白蛇ですが、明日わこの樅の木が、枘に伐られてしまいますから、まことに濟みませんが、何卒私を此處からおろして、他の木え移して下ださいませんか！』

と、云う依頼です。

聞けば獵師も氣の毒ですから、

『そうか、それわ嘸困るだろう。でわ私が助けてあげるが、また食い付いちやアいけないぜ。』

『何う致しまして、蝮蛇やはぶなら知らん事、私わ辨天様のお使の、白蛇の事で御座いますから、決して人様に害わ致しませんばかりか、命を助けて下だすつた御禮わ、屹度充分に致します。』

と、云うので獵師も安心し、やがて手を伸ばして蛇を傳わらせ、安々と下えおろしてやりました。

すると蛇わ、さも嬉しそうに獵師に向い、

『どうも有難う御座いました。貴君わ全く命の親です。付いてわ此御禮の印に、今晩から貴方にわ、鳥獸から魚虫、また木や草に至るまで、凡そこの世界中に、生きて居る物の言語や音聲わ、皆解る様にしてあげましよう。だが獵人さん！　此事わこの世界で、貴君ばかりに教えるのですから、決して此事を話してわいけませんよ。若しこれを話したら、夫れこそ命を貰いますよ。ようございますか獵人さん！　人に話してわいけませんよ。』

と、云うかと思うと、白蛇の姿わ、何處え行つたか見えなく成つてしまいました。

さて不思議な事も有るものだと、思いながら獵師わ、其儘横になつて寢ようとしますと、また枕元で話聲が聞えます。

『オイ〳〵班さん！　旦那わ此所で寢てしまう様だが、お前わ此所で狼の番をしなさい！　私わ家の方も亦心配だから、是から行つて盜人の番をして來るよ。』

『オ、然うだなア。狼の番わ私一匹でいゝから、黑さんお前わ家え行つて、盜人の入らない様にし

て居なさい！』

と、犬同士の相談でしたが、それが皆解りますので、さてわ白蛇の云つた通りだと、獵師わいよ〳〵不思議がつて居りました。

其中にまた寢ようとしますと、今度わ枕にして居た、樒の木の根が物を云い始めるのです。

『ア、〳〵！　こうして人間に枕を貸すのも、もう今夜限りかなア。』

と、まづ嘆息をしましたが、今度わ隣の樫の木に向い、

『樫の木さん！　樫の木さん！　永々御厄介に成りましたが、明日わいよ〳〵伐り倒されますよ。』

『それわまアお氣の毒な……でわ何か遺言でもあるなら、遠慮なく云つて置かつしやい！』

『遺言といつて他にやア無いが、實わ私の根の下にやア、昔から寶が澤山入つてるんで……私の伐り倒された後わ、何所の誰に掘り出されるかと、そればかりが氣懸りで……。』

と、こんな事を云つて居ります。

獵師わこれを聞きますと、ムク〳〵と又起きあがり、

『何だと？　この根の下にわ寶がある？　此奴わい、事を聞きこんだぞ。よし、これを聞くと云うのも、全く白蛇を助けた報で、運が向いて來たに相違ない……善わ急げだ明日とも云わず、こりやア今夜の中に掘り出して、乃公が貰つて行くとしよう。』

と、云う中に支度をして、

『コレ〳〵樒の木さん！　いゝ事を教えてくれたねエ。それぢやアこの寶物わ、みんな私が貰つて行くから、決して心配しなさんな！』

と、云いながら土を掘り返えして見ましたら、成る程金銀珊瑚などの、寶物が澤山出ましたので、獵師わ喜ぶまい事か！　これと云うのも日頃から、私が正直にして居る故だ。もうこんな寶物が入つたら、今までの様な殺生わ廢して、何か好い商賣を初めよう、と、こんな事を考えながら、すつかり寶を掘り出してしまい、これを小腋に抱えながら、勇み立つて家え歸りました。

さて獵師わ、思い掛無い寶の獲物で、俄に大金持になりましたが、こう成つて來ると、今までの様に獨身でわ居られないと、世話するものがあつて、女房を迎える事になり、夫婦間もむつまじく、樂しい月日を送りました。

すると或る朝の事です。獵師わ起きて緣側え出て、何の氣もなく藏の方を見ますと、彼方の戸の側に雀が大勢下りて居ましたが、その中で親雀らしいのが、チウ〳〵云つて居りますから、何と云つてるかと耳を濟ましますと、雀の親わ子雀に向い、

『コレ〳〵、お前達！　お米を食べるなら、落ちてるのをお食べよ。俵の米わ人間のだから、決して食べてわ成らないよ。』

と、云い聞かして居る所です。

獵師わ感心して、

『成る程雀も感心な事を云うわイ。』

と、思わずニツコリ笑いました。

此時女房わ、朝飯の御膳立をして居りましたが、不圖亭主の笑顔を見ますと、直ぐに側えやつて來まして、

『あなた何をお笑いなさるんです？』

と、聞きました。けれども獵師わ、譯を云うことわ出來ませんから、

『ナニ何でも無いよ。』

と、云いましたが、女房わ聞きません。

『何でも無いぢやありません。今笑つた事わ、一體何うしたんです？』

『イヤ何も笑やしないよ。』

『イヽエ確に笑いました。さアその譯を云つて下ださい。』

『何もそりやア……云う譯にやアいかん。』

『何でも聞かなけりやア成りません。さアお云いなさい！　お云いなさい！』

と、果わ胸倉を取らぬばかりに、はげしく促がし立てますので、獵師も閉口し、

『これわ何うも飛んだ事に成つてしまつた。白蛇に堅く口止をされたから、誰にも云うまいと思つたが、いよ〳〵云わなけりやア成らん事に成つた。云えば命わないものだが、それも約束だ、仕方がない。』

と、腹の中で覺悟を極め、やがて女房に向いまして、

『よし、それでわ譯を云つてやるから、乃公の白無垢を持つて來い！』

『白無垢なんぞ何に成さるんです？』

『白無垢を着なけりやア云う事わ出來んのだ。』

『それぢやア仕方がない、お着なさい！』

と、持つて來た白無垢を、亭主の獵師に着せますと、獵師わ其姿でまた寢床え入つて、北枕の西向きに成り、今や遺言をしようと云う有樣です。

すると、丁度此時納屋の方で、頻りに鷄が鳴いて居りましたが、獵師わ今生の聞き納めだと、目を閉じて耳をすましますと、その中で雄鷄らしいのが、

『コケコツコウ、コケコツコウ！　なんと人間と云う者わ、思いの外馬鹿なものぢやないか。乃公わ鷄だが、一羽でもつて此通り、五十羽の雌鷄を、素直に云うこと聞かせて居るが、あの人間わどうしたものだ。たつた一人の女房の、我儘勝手を云い募るのに、叱り付けることも出來ないで、今もう死のうとして居る樣だ。なんと馬鹿な話ぢや無いか、笑つてやれ！　コケコツコウ〳〵！』

と、大きな聲で云つて居ります。

『これを聞くと獵師わ思わず、

『成る程！』

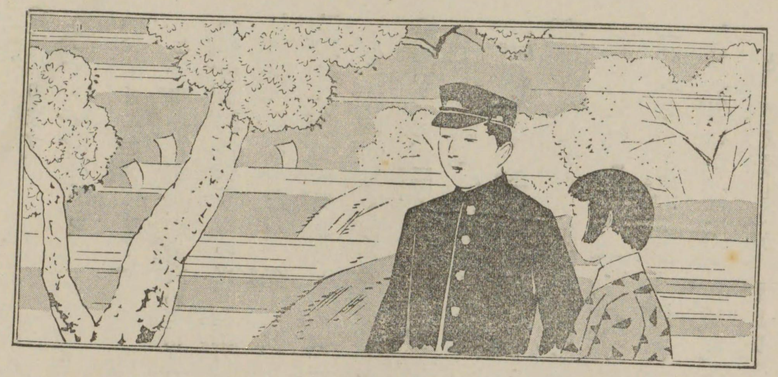
と、叫びましたが、今にも死のうとしたのが、急にまた飛び起きて、いきなり女房の襟頭をつかまえ、

『コレ、お前わ今膳立をして居るんぢやないか。何故はやく用を濟して、乃公に飯を食わせないんだ。さアはやくしろ！　はやくしろ！』

と、恐ろしい勢で叱りましたから、女房わその劍幕に呑まれ、

『オ、そうでしたねエ。すつかり忘れて濟みません。』

と、初めて思い出した様に、膳立をして朝飯をこしらえ、これを亭主に食べさせましたが、それやこれやの用事に紛れて、もう先刻の事を忘れた様に、二度と聞こうとわしませんでしたので、獵師わ危い命を助かり、其後わまた相變らず、樂しい月日を送りましたとさ。



幸福城

或る時、勉二と怠三と云う二人の旅人が、連れ立つて歩いて居りましたが、不圖彼方を見ますと、遙か山の上に立派に光を放つた城が、勉二わこれを見て、

『何うだ、彼所え行つて見ようぢやないか。』

と、云いますと、怠三わそれを聞いて、

『だが、何時行かれる事やら？』

と、云いましたら、其時誰だか後の方で、

『今夜中にわ行けるとも、お前達わまだ若いぢやないか。』

と、云いますから、驚いてふりむきますと、ついに見た事も無い若い女が、而も背中に羽根を生やして、足わ金色の毬の上に乘

つて居ります。

二人わ驚きながら、

『お前さんわ何です？』

と、聞きますと、少女わニツコリ笑いながら、

『私わ幸福と云うものだ。彼方に見えるあの城わ、即ち私の居る所で、是から彼所え歸えるのたが、お前達が來るのなら、先え行つて待つて居るから、はやく後から來るがいゝ。その代り、今夜の十二時が一秒でも過ぎると、門が閉まつてしまうから。そのつもりで急いでお出でよ！』

と、云い棄てゝ行き過ぎましたが、見れば羽根も動かさず、足も動かさないのに、金の毬が自在に廻わつて、瞬く中に少女の姿わ、もう見えなく成つてしまいました。

勉二わ怠三にむかいまして、

『何うだイ、今のを聞いたか？　あれわ幸福の城なんだぜ。彼所え行きやア我等も、みんな幸福に成れるんだから、如何だ急いで行こうぢやないか。』

と、云いますと、怠三わ考えながら、

『だがあんな遠くまで、何うして歩いて行けるものかネ。今の女の子だつて、金色の毬に乘つてつたぢや無いか。はやく何所かで馬を探して來なさい。そうして乘つて行こうぢやないか。』

と、答えましたが、元よりこんな途中で、馬のありそうな譯がありませんから、

『そんな事を云つたつて、馬が無けりやア仕方がない。親譲りの足で歩く計りだ。』

と、勉二が云いましても、

『歩くなら歩いて行きなさい！　私わ今に馬で行くから。』

怠三わ動きませんから、

『それぢやア私わ先え行くよ。』

と、勉二わ一人で行つてしまいました。

後に怠三わ、その影を見送りながら、

『馬鹿め！　とう〳〵歩いて行きやアがつた。あんな遠くの高い山まで、何うして足が利くものか。今に見ろ！　此方わ馬に乘つかつて、後から追い越してしまうから、と云つた所で、全體馬わ何所に居るだろう？……探しに行くにも的が無いが、よいワ、果報わ寢て待てだ。今に天からでも降つて來るだろう。』

と、暢氣な男で、怠三わ其所にゴロリと横に成つた儘、グウ〳〵寢込んでしまいました。

すると、其日の夕方頃、何だか耳がくすぐつたく成りましたので、初めて目を開けて見ますと、何所から來たか一匹の馬が、ちやんと鞍まで着けて立つて居ますから、

『そウれ、だから云わない事ぢやア無い。おとなしく寢て待つて居ると、斯云う果報が降つて來るのだ。どれ、早速乘つて出かけよう。』

と、その鞍に跨がりますと、馬わ直ぐさま飛び出して、間も無く大きな森の中え來ました。

此時また怠三わ、大分腹が減つて來ましたので、

『なんぼ幸福の城え行くのだつて、途中で餓死に成つちやア何にも成らない。どれ、一つ腹をこしらえてから、』

と、木の下で馬からおりて、用意の辨當を食べ初めましたが、腹が張るとまた眠むく成つて、暫時草の上でトロ〳〵とする間に、折角の馬わ何所え行つたか、影も形も見えません。

『オヤ大變だ。』

と、飛び起きて、森中を方々探しましたが、その足痕さえ無いのです。

見ると木の間から、幸福城わ彼方に見えて居りますが、馬が無ければ行かれないと云うので、怠三わ一生懸命に成つて、馬の行方を尋ねて居ます中に、とう〳〵日が暮れてしまつて、自分わ眞闇な森の中に、方角さえ解らなく成つてしまいました。

で、怠三わ、手さぐりでしきりに探しまわつて居ますと、不意に手の尖にさわる動物があります。

馬かと思うと、毛が少しも無く、その上ブヨ〳〵と軟いものですが、何しろ動物に相違ありませんから、乘つたら歩かない事わあるまいと、その背中に這い上がりましたら、成る程ノソ〳〵歩き出しました。

その時尚手で探つて見ますと、丁度鞍でもあろうと云う所に、矢張り堅い物がおいてありますから、まづそれに憑りかゝつて居ますと、その動物わやつとの事で、森の外まで出て來ました。

此時あの幸福城わ、大分近く成つて居ましたが、見ればその塔の上の、大きな時計わもう十一時を過ぎて、約束の十二時に間がありません。

それに動物わ、まだノソ〳〵歩いて居ますから、怠三わ急き込んで、

『エイ、この馬わ何を愚圖々々してるんだ?』

と、云いながら鞭を揚げて、ピシリ〳〵と打ちましたら、脊が妙に動き出して、自分の身體わ眞逆樣に、前え落されてしまいました。

『オヽ痛い、ひどい事をしやがる。』

と、云いながら起き上つて、此時初めてよく見ましたら、その動物わ何あろう! まるで犢牛ほどもある、大きな蝸牛であつたのです。

『何の事だ。こんな奴に乘つてた日にやア、何年經つても行かれやしない。馬鹿々々しい。』

と、怒つて見ましたが、蝸牛わ今鞭で打たれたので、頭も尻も貝え引込めたぎり、角の尖さえ出しませんから、さて喧嘩にもなりません。

それにしても、何か代りに乘る物わ無いかと、怠三わ四邊を見廻わすのに、さて何も見當りませんで、却つて時わ遠慮無く、はや十二時の初めの鐘が、ガアン一つ鳴り出しました。

あゝ、あれが十二時まで鳴らない中に、何でもあの門を入らなければ成らないと、怠三わ地だん

だ踏みながら、

『アヽ何でも可いから乗る物出て來い！　乃公をのせて彼の城まで、はやく、はやく！　はやく！　はやく！』

と、大聲あげて呼びますと、何所でこの聲を聞きつけたか、見る〳〵中に一匹の大蟹が、怠三の前え這い出して來ました。

怠三わ見て大喜び、

『オヽ、蝸牛にやア足が無いが、此奴にやアこれ十本もある。これなら屹度速かろう。』

と、急いで甲良に乗りますと、途端に二つ目の鐘が鳴りました。

此時また城の門にわ、先刻別れた同伴の勉二が、もう何時の間にか着いて居て、此方を向いて帽子を振りながら、頻りに『おいで〳〵』をして居ります。

『忌々しい！　先え行きやがつたア、今行くから待つてくれ！　コレ、はやく彼所まで行くんだ。』

と、また鞭をあげて打ちますと、蟹わ甲良がありますから、少しも痛いとわ云いませんが、その代り前え進まず、右え〳〵と走ります。

『これ、其方え行くんぢやない！　彼所だ、彼所だ、彼の城だ。』

と、云うとまた引かえして、今度わ左え〳〵と驅けます。

時計わ其間にガン〳〵鳴つて、もう六つ目まで打ちました。

城でわまた先刻の少女が出て來て、先に着いた勉二の手を取り、さも樂しそうに奥え連れて行きます。

怠三わそれを目の前に見ながら、右え行つたり、左え行つたり……

時計わ七つ目、八つ目と打つて……果わ残りが二つとなりました。

その時怠三わもう夢中で、初めて乘物の上から飛びおり、足も空に飛んで行つて、城の門を入ろうとしますと、途端に時計わガアンと計りに、十と二つ目を打ち切つて、ガラ〳〵〳〵と云う音と共に、門わビシヤリと閉まりました。

可哀そうに怠三わ、幸福城の門の前に、見事閉め出しに會いまして、いくら呼んでも、叫んでも、誰も扉を開けてくれません。

それに引替て同伴の勉二わ、彼の少女に迎え取られて、奥で御馳走に成つて居ります。

傳說物語 終

昭和八年十月五日印刷
昭和八年十月十日發行

小波お伽全集 第十四卷
傳說物語 奥付

不許複製
檢

定價金三圓

著作者 巖谷季雄 東京市芝區高輪南町五三番地
編輯者 木村定次郎 東京市代々木初臺五六二番地
發行者 吉田百邦 東京市深川區常盤町二ノ一番地
印刷者 尾崎元治 東京市深川區西六間堀一六番地

發行所 東京市深川區常盤町二ノ一番地
吉田書店出版部
小波お伽全集刊行會
電話本所七一六番
振替東京三九八六六番

諸畫伯 小波お伽畫物語 執筆

幼稚園・小學校及御家庭の皆々様へ此の基本的書帖・小波先生の懸命の良書をお勸め申上ます

第一期刊行豫定

モ モタラウ　コサブルカニ
シタキリスズメ　ブンブクチャガマ
カチカチヤマ　ハナサカヂヂキンタラウ
はちまんたらう　べんしうわけかい
おほえやま　らしやうもんきどうまる
ちんぜいはちらう　あさひげんざんみなもと

まだ學齢に達しない小さなお子様。及小學初年級の方々の爲に、美しい畫を主とした、片假名と平假名とばかりの「小波畫物語」を出版します。これは小波先生の全集に漏れたものを別卷として編纂し、假名遣も國定教科書に準據し、活字も大きく、挿畫の色彩にも注意し、娯樂の間に知らず識らず品性向上の目的を達し、且國史上の重要事蹟に通せしめることを主眼としまず、何卒御愛兒お子様の爲に、一本をお求め下されますやう御願仕ります。（版元）

最新版

幼稚園・小學初年級の無上の好良友

四六倍大判背クロース、表紙精巧な原色版、光彩燦爛、挿畫原色版彩色全頁畫入、美本堅牢製本、本文活字二號大の文字使用、全二十四卷の豫定

特價金八十五錢　定價　壹圓也　送料　金十二錢

東京市深川區常盤町　小波お伽全集刊行會

吉田書店出版部　振替東京三九八六六番　電話本所七一六番